昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和45年3月1日発行毎月1回1日発行

日本バドミントン協会

バドミントン界

THE BADMINTON WORLD

no.7
1970
march





NO.3500　キングメイト

KING MATE

¥3,300

キングメイト発売記念クイズ

問題　①キングメイトとはなにの製品名でしょう
②サンバタ製品名を一つあげて下さい

●応募方法
官製ハガキにこたえと住所・氏名・職業（学校名又は会社名）・バドミントン用品お買上げスポーツ用品店名を明記して下記へお送り下さい。
東京都渋谷区笹塚２丁目46番８号
（株）諸江製作所　キングメイトクイズ係

●締切り
昭和45年５月30日（当日消印有効）

●発表
正解者全員から厳選抽選のうえ，バドミントン界誌上及び当選者に直接ご連絡致します。

★サンバタ賞（１名さま）
キングメイト4本・サンシープ10張・ダンロップバッグ1ケ
バドミントンシューズ4足・プレス（W）2ケ・バドミントン界1年分

★キング賞（３名さま）
キングメイト4本・サンシープ10張・バドミントンシューズ4足

★クィーン賞
キングメイト2本・サンシープ5張・バドミントンシューズ2足

★キングメイト賞（20名さま）
キングメイト1本・サンシープ2張

★ゴールドキング賞（30名さま）
ゴールドキング1本・サンシープ2張

株式会社 諸江製作所

通常払込料金加入者負担

払込通知票

口座番号	東京	十	万	千	百	十	番
			3	2	1	9	3

加入者名　日本バドミントン協会

金額	億	千	百	十	万	千	百	十	円
	※								

払込人住所氏名　※

備考　受付局日附印

（郵政省）

文字は正確明りょうに、数字はアラビア数字を使ってお書きください。

各票の※印欄は、払込人において記載して下さい。

通常払込料金加入者負担

払込票

口座番号	東京	十	万	千	百	十	番
			3	2	1	9	3

加入者名　日本バドミントン協会

金額	億	千	百	十	万	千	百	十	円
	※								

払込人住所氏名　※

料金	払込	特殊	円	受付局日附印
備考				

（郵政省）　局番号印

記載事項を訂正した場合は、その箇所に証印してください。

各票の記載事項にまちがいのないことをお確かめください。

雑誌「バドミントン界」ご購読の方に

個人，団体を問わず，購読ご希望の方は直接日本バドミントン協会へ申し込んで下さい。

一部 100 円	一年分 1000 円
送料 40 円	送　料 200 円
計 140 円	計 1200 円

この用紙の表面※印欄と，通信欄に記入して，代金を添え近くの郵便局へお出し下さい。

この欄は協会あての通信にお使いください。

通　信　欄

「バドミントン界」《第七号》

〔競技会〕

▼ト杯速報アジア地区決勝で日本、インドネシアに惜敗……2
▼第4回社会人×学生対抗　小島らト杯代表の貫禄……14
▽全試合評（各氏）▽ヘアピン▽観戦記…吉広紀代子

〔写真グラフ〕

〈第1回女子チャンピオンズ・トーナメント〉から……17

〔特別企画〕

▼緊急特報／汚点を残したインドネシア×タイの紛争……3
▽IBFの報告書にみる両国のいい分
▽特別寄稿＝毛利清志氏
▼第3回全国高校合宿から……7
▽総括報告＝伊藤基記　▽基礎体力＝遠井稔男
▽基礎打法＝脇坂安隆、佐藤茂雄
▽フィルム観戦＝毛利清志　▽全員参加のティーチ・イン

〔連載企画〕

〈百万人のバドミントン上達法〉……15
▼続・サービスの重要性（上級編）　毛利清志
▼サービスについて（中高校編）　遠井稔男
▼（幼少編）　伊藤基記
〈私の場合〉ふところで暖めたラケット……岡　道明……23
〈理事長対談〉第六回　スポーツ少年団本部長・野津謙氏……1

〔よみもの〕

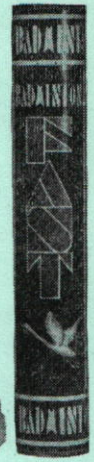
〈グループ訪問〉……小林範夫……24
〈スポーツ・サロン〉……25
▼提言シリーズ　第二回（ファンと協会）……竹市行男
▼スポーツと心理学（下）……後藤忠弘
▼北から南から（命ある限り・見事なカムバック）
私のラケット……29　読者から……29
質問箱……30　告知板……32
ルール100問……34　表紙……36
おしらせ……36　編集後記……36
〈RECORD〉……35

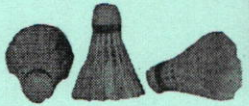
表紙／撮影・松井亮裕／デザイン・小浜正道
カット／おおば比呂司・秦浩

水鳥 検定合格球

ファストゴールド

ファストシルバー





ファスト印シャトル
コック製造発売元

有限会社 ジャワ商会

山形市六日町7-28
電話 02362 (2) 3994

理事長対談…⑥



日本体育協会スポーツ少年団
本部長
日本蹴球協会会長

野津　謙氏

ききて……川端昇市

川端　昨今、社会体育の必要性、重要性が問題になっていますが、スポーツ少年団もその一翼を担うという点では大変、意義深いものを持っていますね。

野津　お説のとおりで、日本スポーツ少年団も、創立七周年を迎え、このあたりで脱皮をはからねばという声も強まっています。

川端　当初は特別なスポーツをやるという形態ではなくして、ボーイスカウト的な印象が強かったように記憶しているのですけれど……。

野津　そう、はじめは確かにそういう傾向でしたが、このあたりで、サッカー少年団、バレーボール少年団といったふうにうんと育成して行きたい、またそうした少年団に参加してもらおうといっているんですよ。

川端　私どもの方では、まだ少年団組織というはっきりしたものはないんですけれど、これからやって行きたいと……。

少年団の育成と活動を
バドほど普及しやすいものはない

野津　いやあ、結構なことですよ。私は昨年、女子のユーバー杯を見ましてね。感心したんですよ。むろんどのスポーツにもスポーツ道、たとえばサッカー道とか、バレーボール道とか、そういったスポーツの深味はあるが、バドミントンの場合、非常に手っとりばやく入れるという利点があって、確かに少年団を作る意義も大きいですね。それは普及にもつながってくるということでしょう。

川端　そりゃ、随分と体力を消耗するものだし、その意味ではバスケットボールなどよりも疲労度は激しいスポーツです。むろん深みというか、巧くなればなるほど奥行きの深いものであることはたしかです。

野津　そうでしょうねえ。私たちが見ると羽根つきのような気がするんで……。これは大いに日本的であり、いいもんだという気がしますがねえ。

川端　子供たちに聞くと、羽根つきなんてつまらない。バドミントンの方がずっとおもしろいなんていいましてね。（笑）それで私どもの協会では、指導委員会と競技力向上委員会とふたつの機構で、指導委が普及を、競技力が国際級選手の養成をはかってるんですが……。

野津　バドミントンはレクリエーションとスポーツのふたつの要素があるようで、その点、ただ単にレクリエーションにとどめることなく、それをうまくスポーツにつないで普及と発展をはかること、これは大切ですね。

川端　いま研究中なんですがスポーツ少年団にうまくかみ合わせようと……。

川端　ええ、おかげで女子は二回続けて世界一、男子はやや劣るといっても三強のうちに入ってますから……。

野津　アジアのスポーツなんですってね。そういう意味でも推進力となる日本の立場は大変ですね。

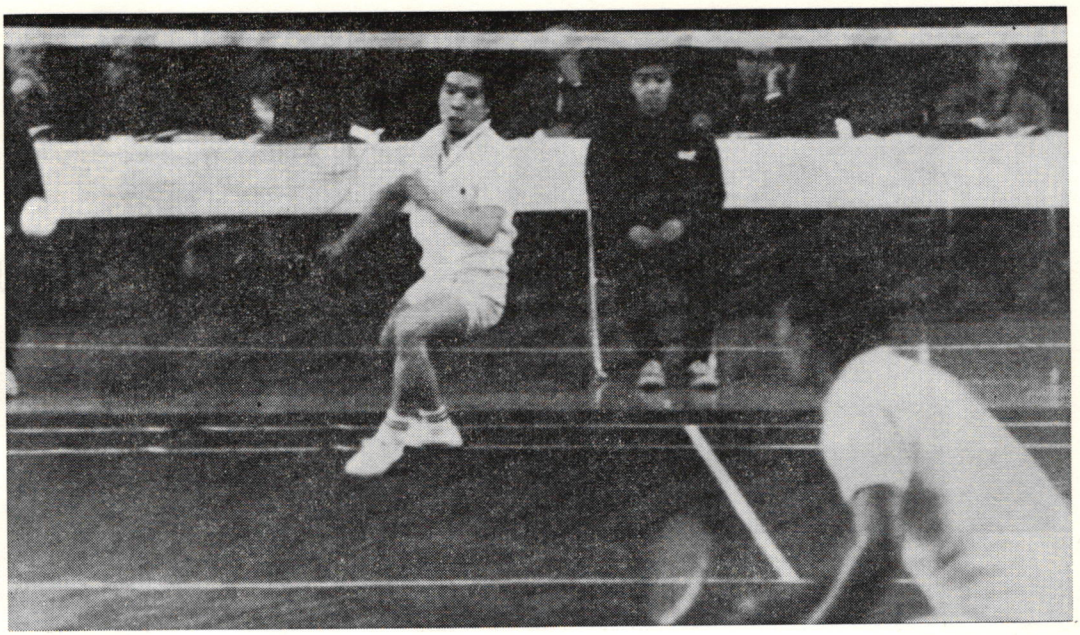
川端　そうなんですよ。これから大いにハッスルしますのでぜひよろしくバドミントン少年団をご支援下さい。（笑）

野津　ええもう、もちろんですとも……。大いに活発な活動をやって下さい。（笑）

野津　いいことですよ。ことしの夏に、本栖湖でやる少年団の全国大会にも、バドミントンの指導者を派遣してもらうといいなあ。

川端　それはほんとうに願ってもないことです。先日も青木体協専務理事にうかがったんですが、各地のスポーツ・センターなども有効に利用させてもらおうと考えているんですがね。

野津　いいですよ。どんどん使用されたら、かんたんなんですもの、健康的ですしね。それに日本は強いんですね。



▶第一日シングルス　小島、健斗してムルヤジをくだし貴重な1勝をあげる＝共同PHOTO提供

速報　日本4―5で涙のむ

トマ杯アジア決勝　対インドネシア

ダブルスに完敗

日本、宿願ならず――トマス杯男子世界選手権アジア・ゾーン決勝、日本×インドネシアは二月二十五、二十六の両日、京都市体育館で行なわれた。

この対戦は、つぎのページ以下でのべるように、インドネシアXタイ戦の紛争の結果、IBF（国際バドミントン連盟）の裁定で、いったん棄権負けとなったインドネシアが、一転して日本の対戦相手となったもの。

この紛争のあおりで、日本は予定試合日の数日前まで、インドネシア、タイのいずれと対戦するかわからず、精神的にも大きな被害を受けた。

それはさておき、日本は第一日に、小島（ヨネヤマ・ラケット）がシングルスでムルヤジをくだした1勝しかあげられぬことがたたり、第二日の最終試合を待たずに5敗し、ついにインターゾーン進出の望みを絶たれた。

経過的には、ダブルスが弱く勝敗決定後の一試合しかとれなかったこと、技術的にはスピード、サーブの弱かったことが敗因だった。

インターゾーンは五月二十八日からクアラルンプールで行なわれる。（詳報は第8号に）

インドネシア　5（単2―3　複3―1）4　日本

◆第一日

▼シングルス

○ハルト　2（15―15―10）0　秋山　ノ

ムルヤジ　0（6―6―15）2　小島　○

▼ダブルス

ハルト、ノ　2（15―15―11）0　堺本　○

○インドライ、トノ

◆第二日

▼シングルス

○ハルト　2（15―15―6）1　小島　ノ

ムルヤジ　1（10―17―4―15―15）2　秋山　○

ダルマジ　1（9―5―15―15―7）2　本間　○

▼ダブルス

ハルト、ノ　2（15―15―10―12）0　秋山　○

○インドライ、トノ

ムルヤジ、インドライ　1（6―3―15―15―4）2　梶野尾　○

グワナン　西野

☆★☆★☆★☆★☆★

緊急特報

★☆★☆★☆★☆★☆

汚点を残した〝逆転劇〟

ト杯アジア西地区決勝

インドネシア×タイの問題点

ト杯アジア西地区決勝は、前号既報のように、いったん、タイの勝利と決まったが、その後インドネシアの抗議が通り「日本で残りを再試合」というIBF（国際連盟）の裁定が下された。しかし、こんどはタイがこれに従わなかっただため、タイの棄権が宣せられ、インドネシアが日本とアジア・ゾーン決勝で対決するという〝逆転劇〟を生んだ。

日本のファンにとっては、わけのわからぬ経過だったが、この紛争の原因は、タイの審判技術、それも〝身びいき判定〟か否かというところだったらしい。

インドネシアの主張どおり、タイが〝身びいき〟したとすれば問題だし、またIBFがインドネシアにのみ耳をかしたとすれば、やはり問題。

いずれにしろ、スポーツ界に汚点を残した。IBFからの報告要旨とともに、毛利清志氏の特別寄稿を掲載、読者の判断を待つことにした。

1 国際連盟からの報告書

紛争の原因は審判技術

?!くいちがう両者のいい分

【インドネシア・チーム監督からの電報要旨】（1月17日、IBFあて）

①線審、審判、名誉審判はタイの運営委員会から選出され、タイ側に片寄った判定をした。

②それは前もって周倒に計画されていた行為であり、名誉審判は、「六十二年のアジア大会（ジャカルタ）の時のしっぺ返しだ」と説明した。

③試合が中断された時は3―2でインドネシアのリードであった。

④インドネシアは名誉審判の決定に従わず、解決をIBFに委ねる。

〝計画された〟誤審

【インドネシア協会長からの抗議文】（1月23日、IBFあて）

①監督からの電報を強く支持する。

②最終日第二試合、ムルジャディが試合続行を拒否したのは九千人の観衆がひき起こした混乱が理由で、その原因は線審、審判の判定にある。第一日の判定をめぐって口答で三度、抗議を行ない、名誉審判はこれを認めたが、最終日も審判の態度は変わらなかった。

③誤審の具体例をあげれば㈠サービス・フォルトをひんぱんにとる（インドネシアの選手は国際試合でこれまでサービス・フォルトをそれほどとられたことはなかった）㈡同封の一月十七日付け〝バンコク・ポスト〟紙上でも明らかにされているように、でたらめの審判判定はIBFルールを無視したものだった㈢サービス・ジャッジがレシーバーまで判定し、審判がサービス・ジャッジの意見も聞かずサーバーに〝フォルト〟をたびたび宣言した㈣線審は〝イン〟を〝アウト〟といい、又その逆もあった。

④試合中断の時、審判は両チーム主将と協議する責任があった。しかしインドネシア主将はその時、審判の所へ行くことを妨害された。

⑤問題が起こった時の記録となる写真がないのは残念だが、タイ人以外に撮影が許可されなかった。だが、目撃者や駐タイ・インドネシア大使の話によれば観衆のさわぎでムルジャディがレシーブの体勢がとれないところへソムサクがサービスをした。

⑥これらの事情からインドネシア選手は試合をすることは不可能となり、名誉審判は役目を果さなかったといえる。

以上の理由によりインドネシアは3―2から、IBFの直接運営により中立国で試合を再開するよう要請する。

【インドネシア・チーム監督からの経過報告】

前回の〝しっぺ返し〟か

――インドネシア――

①一月十三日、名誉審判を議長に監督会議を開き、第一日、最終日の組み合わせ抽選を行なった。

②会議の席上、審判、線審に関する問題は何も話されなかった。

③第一日第一試合、ハルトノが勝ったが、審判、線審の判定はインドネシアに不利だった。例えば、インドネシアの〝イン・ドロップ〟は〝アウト〟にされ、タイ選手には逆がいわれた。正しいサービスでも〝フォルト〟をとられた。選手と私は、試合中、名誉審判に抗議しようとしたが、運営委員に妨害され、できなかった。会場には警察、陸軍が配置されていた。第一試合終了後、私はコートの中へはいり抗議、名誉審判は正しい審判を行なうことを約束した。

④第二試合もムルジャディの勝利が決まったが、審判は不明朗であった。

⑤第三試合のダブルスはタイの勝ちとなったが、第一ゲーム15―7のあと、第二ゲーム12オールからタイは13―12となるポイントをいきなり14―12とし、マッチ・ポイントを迎えた。タイ選手も主審に13―12ではないかといったが、訂正されなかった。インドネシアはここで名誉審判に三度目の抗議をしたが、何も改善されなかった。

⑥第四試合終了後、名誉審判に四度目の抗議をした。この時名誉審判は「インドネシアも六十二年に同じことをしたではないか」というので「では今回はその復しゅうか」と聞いた。

⑦最終日の試合開始一時間前監督名で抗議を文書にして名誉審判あて提出した。名誉審判はいつでも抗議できることを約束し、私とコーチがコートの中にはいれる許可を与えてくれた。また誤審をした審判と線審は交代すると約束してくれた。

⑧最終日第一試合でもダルマジが試合中、審判に強く抗議したが受け入れられなかった。試合終了後、私が抗議、線審を変えるよう申し入れたが、次の試合からはミスのないようにするという回答だけだった。

⑨第二試合でもまた誤審があり、ムルジャディは何回も抗議したが、何も聞き入れられなかった。12―11の時フォルトをとられた。これは実際、誤審だった。ムルジャディは抗議しコートに立った。コーチの一人が名誉審判にしばらく試合を中断してほしいと申し込んだが、観衆がコートへどっと押し寄せ、私も試合中断を申し入れた。タイ通信大臣がコートにおりてムルジャディに試合続行の意志の有無を聞いたが、名誉審判はムルジャディが五分間、試合継続を拒否したという理由で棄権を宣告。

だが同封した写真からもわかるとおり試合は続けられる状態ではなかった。私は名誉審判に残る試合は中立国で再開するよう申し入れたところ3―3からなら応じてもよいと答えた。だが私は3―2の第二ゲームから再開すべきだと主張した。この話し合いが終了しないうち名誉審判は残る試合はインドネシアの棄権と宣言、6―3でタイの勝ちと決定した。

すべてはルール通り 問題なし

――タイ――

【ピエンサク名誉審判（タイ）の報告書要旨】（1月21日、IBFあて）

最終日の試合前、インドネシア・チームの監督から第一日の審判に失望したという主旨の文書を受け取り、経験を積んだ審判に変えてほしいという要請を受けた。しかし審判、線審の判定は国際水準、バドミントン・ルールにのっとったものであった。だが申し入れが無視されたわけではない。最終日の第一試合終了後、私は監督に判定について問いただしたところ〝結構だ〟という答えだった。

また第一試合開始前、線審を変える必要があれば変えてもいいと伝えた。第二試合は長いラリーがつづく大変な接戦となった。11―12からタイがサービスをしようとした時、インドネシアは体を動かしたので、そのポイントはタイに与えられた。ここで抗議がなされたが審判は判定を変えなかった。するとインドネシア選手は試合を続行する態度を見せず、審判に礼を失する態度をとり、線審にシャトルを打ちつけた。

審判の試合続行という命令にもかかわらずインドネシア選手は試合態勢にはいらなかった。時間がたち、審判は席を離れ、この試合はタイの勝ちとした。この時、駐タイ・インドネシア大使とアジア大会組織委員長、タイ空軍元帥、タイ協会会長らが個人的にインドネシア選手に試合を続けるようアピールしたが、何の効果もなかった。

しかしまだ三試合が残っており、第三試合の開始が宣言されたが、インドネシアの監督は第二試合が再開されない限り、第三試合には出場しないと主張した。だが審判はそれを認めなかった。

私の意見によれば第二試合をインドネシアの棄権とした審判の決定はルール上正しいものである。長い時間をかけて説得したが、インドネシアは第三試合、コートに出なかった。そこで審判は残る三試合はインドネシアの棄権とせざるを得なかった。この結果、タイは6―3で勝ちとなった。

因果なインドネシア×タイの関係

2毛利清志氏の所感から

【編集部から】この稿は前ページのIBF報告書を補い、紛争の背景と究明に大きな手がかりとなるものである。

ただし、当編集部が、この稿を入手後、タイが再戦を棄権、インドネシアとの残り試合が日本で行なわれないまま、日本がインドネシアと対決するという情勢の変化があった。

このため、記事の後段の部分が結果として、現実からずれたことを、お断わりしておく。

なお、筆者は、この稿について特に「これが良いプレーヤーであり、同時に立派な審判であるための資料にしてもらえれば幸い」とのべている。

一月十八日の各新聞が、バンコクでのト杯アジア西地区決勝におけるインドネシア×タイの第6試合目におこったトラブル（インドネシアが線審の判定に対して抗議……）をこぞってとりあげたことは読者の皆さんが先刻ご承知の通りである。筆者は同じ事件について、今井先生（第5回ユ杯監督）から翌十九日の英字新聞の記事の内容についての説明をお聞きし、その切り抜きをいただいてトラブルの真相を探究するヒントとチャンスを与えられたのである。まずその記事をご紹介しよう。

【バンコク発＝UPI】インドネシア・チームの主将ムルジャイは（本誌№5の同稿でとりあげた堺選手との対戦者ムルヤディと同一人物、どちらが正しい読み方であるか不明）タイの主審ブリーチャの不公平を非難して、競技を続けようともせず、退場もしないで強く抗議した。ブリーチャは、ムルジャイの相手タイのソカノンド（ソムサクと呼ぶ人も多い）選手に競技を続行するよう命じた。ソカノンドは、ムルジャイのコートに4回シャトルコックを打ちこみ、そのセット（ゲーム）を勝った。九千人の群衆はムルジャイの抗議に騒然となり奇声をあげた。

アジア競技組織委員会会長、タイ空軍司令官マーシャルはコートに歩みより、インドネシア＝ムルジャイ選手に続行するよう促したが彼は拒否した。なお順序が逆になったが同新聞の見出しには、審判上の紛争の後、インドネシア選手が競技続行を拒否したため、ト杯アジア西地区優勝戦において、タイが勝利を占めた、と報じている。

さて、同新聞や、その後の各種情報を総合分析しながら、筆者の考察を述べて見よう。

第一日目

	インドネシア	対	タイ
1単○ハルトノ	2(15—11)	0(16—10)	ソカノンド
2単○ムルヤジ	2(15—15)	0(9—8)	サンゴブ
3複 ハルトノ・インドラトノ	1(11—17)	2(15—14)	ナロン・チャバレト○
4複 ムルヤジ・ミンタリア	0(7—5)	2(15—15)	サンゴブ・シラ・ウ○・ラオ

第二日目

5単○ダルマジ	2(—)	0	バンディジャイアン
6単?ムルヤジ	0(12—0)	2(15—15)	ソカノン○ド
7単 ハルトノ	(—)		サンゴブ
8複 ムルヤジ・ミンタリア	(—)		ナロン・チャバレット
9複 ハルトノ・インドラトノ	(—)		サンゴブ・シラ・ウ・ラオ

（○印は現在までの勝星）

問題は2日目の第6試合でおこった。即ち、その日のトップ・シングルスをインドネシアが取ってトータル3—2とリードした後インドネシアの№2ムルジャイ（インドネシア同志での決勝となった昨年3月の全英ではムルジャイはハルトノに負けている）が、タイの№1ソカノンドと対戦したのである。

前記でみるように、ダブルスに強いタイもシングルスで最少限1勝あげねばどうにもならない（9試合中、5試合に勝たねばチームとしての勝ちにならない）のである。そしてその望みがインドネシアの№2と対戦するタイのエースであるソカノンドにかけられたことは極めて当然のことであろう。

ソカノンド自身は何とかして前日の借り（ハルトノに負けた）を返して期待に応えたい一心であり、九千人の大観衆もタイの役員団も、勝たせたい気持に溢れ、目の色を変えてその成り行きを見守っていたに違いない。

一方、インドネシアにとっても、前日のダブルスで2点落しているだけに、この日のシングルスで3勝せねばならない（ダブルスで計4点を失う可能性からシングルスでは1敗も許されない…）のである。換言すれば、ムルジャイが敗れたら、苦手のダブルスで勝点を挙げねばゾーンの決勝にさえ出場できないのである。もし、そうなったら、トマス杯でチャンピオン最多記録を誇るインドネシアにとっては、堪えられない屈辱なので、一歩も譲れないわけである。

いわば両者は、それぞれチームの勝敗の鍵を双肩にになう、国の名誉と期待を一身に浴びての対決を余儀なくされるハメとなったのだ!! 文字通り興奮のルツボと化した競技場で前述のトラブルがおこったのである。

話題がいささかさかのぼって恐縮だが、ことのついでに両国間の過去のいきさつについて少し触れておきたい。

一九六二年の第四回アジア大会（ジャカルタ）で、団体の決勝で両チームが対決し、タイが審判に抗議した結果、受け入れられず、涙ながらに棄権した。一九六五年の第五回アジア大会（バンコク）では、タイは自分の国が楽々と決勝に進めるような組合せを作り、反対ゾーンに固められた日本とインドネシアはマレーシアに敗れ、タイはマレーシアを破って優勝した。（そして今回はその後を受けて宿命の対決となったのである。）

以上のような過去のいきさつが尾を引いているとするならば今回の火花を散らすような問題もおこるべくしておこった？といえるように思うのは筆者一人ではなかろう。

ところで、トラブルのおこった試合内容をいま少し掘り下げて見よう。

ムルジャイが12—11でソカノンドを1点差にリードしている

ときにこの問題がおこった。即ち、ムルジャイは13点目をとるべくサービスを送りこみ、そのラリーに打ち勝った。（少なくとも本人はそう思いこんだ）ところが線審の判定は意外にもソカノンドの勝ちであり、主審（プリーチャ＝タイ）はサービス・オーバーをコールした。

ラリーがデッドになったときのシャトルが、ムルジャイ側コートに落ちた場合を考えて見ると、ムルジャイはアウトだと判断して見送ったのに、インと判定されたのであり、逆に、ソカノンド側に落ちた場合を考えるとムルジャイはインだと判断しているのにアウトの判定をされたのである…。

とにかく、ムルジャイとしては相当な自信があったので飽くまでも抗議を続け、主審にプレー続行を促されても応じなかった。主審は、線審の判定は最終のもの（主審といえどもそれをくつがえすことはできない）であることを理由に抗議をはねつけると同時に、ソカノンドに試合を試合を進行するためのサービスを打ちこむよう命じた。

そこでソカノンドは全くレシーブの意志のないムルジャイに向って11点からの4回のサービスを送りこみ、まことに不可思議なサービス・エースで、ノータッチの4点を連取したのである。このようなことは、約二十年間の筆者のバドミントン生活中、未だ見聞したことがない。

もちろん、主審はその得点を認め、ぼうぜんと眺めるムルジャイを尻目に15―12でソカノンドの勝ちを宣した。ムルジャイはこの一方的な処置にがまんできず第2ゲームを放棄し、更にインドネシア・チームとしても残り3試合を拒否したことは既述の通りである。

この間、主審の処置は規則上間違ってはいない。否、ムルジャイが競技続行を拒んだ時点で退場を命じ、ソノカンドの勝ちを宣しても、間違いではなかろう。問題はＩＢＦ（国際バドミントン連盟）から、アジア西地区決勝の運営を委託されたタイが、真のスポーツマンシップに則って試合を運営し、過去のわだかまりを一掃するべき配慮と努力をなしたかどうかにある。

特に直接の関係者である審判団全員が天地神明に誓って公正であるように事前に充分な教育がなされ、線審にミス・ジャッジがあり、抗議があれば線審を交代せしめるぐらいの誠意を示せば、ムルジャイも試合を続行し、残り3試合も無事、終了できたように思うのである。

タイはトータル6―3で勝った形にしたが、インドネシア側の立場からいえば試合を没収された？　ともいえるのである。その後の各新聞などの情報（ロンドン二月三日発ロイター＝共同他）によると、インドネシアがＩＢＦに提訴し、ＩＢＦは日本の東京で次のような条件つきの継続試合を行うことをきめてＮＢＡ（日本バドミントン協会）に要請してきたのである。

そしてＮＢＡはその依頼を引き受けたわけである。

(1) 3―3のスコアから再開する（インドネシアは問題の第6試合から再開の申し入れをしたようであるが、これについてはタイの主審の取り扱いに敬意？を示し、ソノカンドの勝ちを認めている）
(2) 両国ともメンバー（オーダー）は変えない
(3) 主審はＩＢＦが指名するところで、ＩＢＦが日本をえらんだ理由は、
(1) 日本の大会運営、特に審判は世界最高であることが国際場裡に認められていること
(2) 日本がアジア・ゾーン決勝に進出し、その試合を日本で開く準備を進めつつあったこと
(3) アジアでおこった問題なので同地区のリーダー格である日本にその善後策を求めたこと
(4) インドネシアもおそらく日本での再開を希望したこと（インドネシアは日本に対し(1)の点で特に高い評価と信頼をもっているから）

等が考えられる。ところがその後タイは、ＩＢＦの決定を一方的なものと考え「再試合に応じない」と発表したり、一方のインドネシアは、「応じなければ不戦敗となる」などコート外で争ったり、国の威信、スポーツマンシップの真意は…などにぎやかなやりとりの様子は読者がご承知の通りである。

しかしながら、ＩＢＦの加盟国である以上、ＩＢＦの主催するト杯戦に関する決定に従わねば棄権と見なされることは明白？である。従ってＮＢＡがＩＢＦに連絡した通り、二月二十二日京都（西京極体育館）で両国の残り3試合を再開して決着をつけるとともに、その勝者と日本チームとが二十五、二十六の二日間アジア・ゾーンの代表権を競うことになるだろう。今や国際場裡にイニシアチブをとっていこうとする日本としては、引き受けた以上その重責を立派に果さねばならない。

最後に日本チームの立場を考えて見たい。トラブルがおこらねば一カ月前に相手チームが決まり、オーダーを予想しての、計画的練習ができたことであろう。ところが三日前でなければどちらか決まらないのである。両チームとも世界的強豪である上、インドネシアはシングルスに強く、タイはダブルスに強いという正反対の相手である。筆者も昨年六月のユ杯東京大会で挑戦国が決まるまでの精神的重圧を体験したので小宮監督、福井コーチを始め六名の選手各位の心情は想像にかたくない。しかしながら、反面ダブルス2試合とシングルス1試合をお互いの眼で見ることのできる有利さがあるのでそれをフルに活かして欲しいと思う。それは、3―3の対スコアから再開される3試合ではあるが、いずれにとっても負けられない白熱戦となることは必死である上、考え方によれば計5試合分を見ることに価するからである。

読者各位がこれを読まれる時点にはすでにこの稿に関する結論が出た後になることは残念にたえないが、現在（2月11日）の気持は読者も筆者も全く同じであろうと思う。即ち、それは、日本の役員団も選手団も国の名誉にかけてあくまでもフェアーに運営、進行し、かつ、フェアーに戦って実力を充分に発揮していただきたいと願っていること、針穴程のアン・フェアもあってはならないのである。

第3回 全国高校選抜合宿

（1月12日―15日・東京青少年センター）

〝若い力〟に多大の成果

第三回の全国高校選抜合宿が一月十二日から、東京オリンピックの選手村だった青少年センター（研修館）で、三泊四日の日程によって行なわれた。次代のト杯、ユ杯代表めざす〝若い力〟の集まりだけに、担当の先生方も、あっとおどろくタフなエネルギーを発散、将来の希望を持たせた。内容は、技術、体力の基礎的トレーニング、質疑討論（座談会）が主だったが、この短かい期間に、高校生たちが、なにを得たか、ここに特集してみた。

総括報告

指導委員長　伊藤基記

第三回を迎えて、この高校合宿も恒例化され、日バの重要行事として定着した感がある。

今回の合宿の特徴の第一は従来の二泊三日を三泊四日にしたことである。初日と最終日の半日はどうしてもオリエンテーション的なもの、あと始末的なことに時間をくわれて落つかず、中の一日しか充実した時間を持ち得ないということで、敢えて三泊に踏みきったしだいであった。

内容としては勿論、特別にとりたてる程のものはなかったけれども、遠井講師による基礎体力のトレーニング、脇坂、佐藤(茂)、大世古の諸講師による各種トレーニング及び基本打法さらに試合練習、毛利講師によるユ杯のフィルムとビデオの観研は、それぞれ一応の成果をおさめることができた。

参加された引率の先生方、高校生諸君の座談会等の中にみられる発言の中に、これ等の実施内容の中からそれぞれ我々の意図するものを吸収していただいたことが実感され、手前味噌のようであるがうれしいことであった。

女子における世界の頂点的なプレーを繰り返し再現できる貴重な機会、全国各地から意欲にみちて参じたお互い同志のぶっつかりあい、大学生や指導教官の胸をかりる試合練習、座談会をはじめ、生活動作に附随する対談の中に、多感な高校生諸君が我々の予想をこえた何かを掴んで帰っていったとすれば、これはまた望外の喜びである。

ただ難をいえば、男子が女子の半数そこそこで、いささか意気あがらぬ面もあった。地区の選抜、推せんであるために、予め、男女同数を選んでおくことが不可能であることから、この片よりを招いているので、今後再検討することになるだろう。

実施の時期についても、ウィークデーは困るという御発言があった。我々としてもこの点いろいろと検討はしてきたのであるが、センターの都合もあり、会場、指導者、参加者の条件がなかなか揃いにくい現状では、どうしてもこの寒い一、二月がこれに当てられることになってしまっている。

指導委員会自体が独自の予算をもっていない点もあり、また高体連専門部の立場もからんで実際にはどうもすっきりしない面もあったが、しかし、一応、一人の故障者もなく無事終了したことを多とすべきであろう。

御多忙中にもかかわらず、かけつけていただいた川端理事長はじめ日バの役員の方々、練習相手にかけつけて下さった大学生諸君、陣中見舞を賜った多くの方々にこの紙上をかりて厚く御礼申しあげたい。遠井講師は特に計画から会計まで、風邪をおしての御尽力をいただき、これを直接たすけて石崎、堀川両嬢が献身的な奉仕をしてくれたことも、この際、特筆して御礼を申し上げておきたい。

合宿日程表

日　時	行事内容
12日　11.00～12.00	集合・オリエンテーション
1.00～ 3.00	基礎体力トレーニング
3.00～ 4.30	基本練習
6.00～ 7.30	ユーバー杯フィルム観研
13日　9.00～12.00	基礎的トレーニング 基本打法の練習・試合練習
1.00～ 4.30	大学選手との試合
6.00～ 7.30	ユーバー杯ビデオテープ観研
14日　9.00～12.00	大学選手との試合
1.00～ 4.30	トマス杯フィルム観研 研究討議
6.00～ 7.30	参加選手・引率教師・担当者との研究討議
15日　9.00～11.00	参加選手練習試合
11.00	終了式
12.00	現地解散

まだ不足、運動能力

基礎体力のトレーニング

基礎体力つくりのトレーニングを実施した。

① 準備運動↓ジョッグをしながらからだ全体をならす。特に筋力、関節器官など適当に刺激してからだをならす。

② 柔軟体操↓手、足首、首、肩関節、股関節の前後側開など、また、からだの前後屈、側屈、側転など背柱に関する柔軟運動を組み合わせて行なう。

③ スピードのトレーニング

◎前後左右にできるだけ速くステップする

◎パートナー追跡、前後左右パートナーからはなれないようにする

◎ももあげ最高スピード

◎小刻歩、ロングストライド走（30㍍）

◎パートナーをおんぶして20㍍走る

◎あおむけ、腹ばい姿勢から上体そらし、その他

④ 複合トレーニング、体育館の器具を利用、（総時間20分間）

◎1・2㍍台を乗越し↓平均台の下をもぐる↓マットで前転後転↓カエルとび5回↓ジャンプ10回↓ももあげ50回↓腕立斜懸垂20回↓椅子まわり5回↓カニ歩き15㍍↓椅子ののぼりおり20回↓エレベーター40回

以上を20分間、連続して循環してみた。一般的な運動能力をみることができたが、まだまだトレーニングをつまねば、バドミントン選手としては活躍できそうもない。これから大いに頑張ってもらいたい。

（真岡高・遠井稔男）

弱点矯正の重点指導

基礎打法のトレーニング

少ない時間を効果的に使う為に高校生の弱点だけを矯正する重点主義を取り、左記の5点だけを指導した。

①全部ロングで返球させる

指導者側はオールラウンドに配球し、選手はこれを全部ロングで返球させる。

②全部ショートで返球させる

指導者側はオールラウンドに配球し、選手はこれをドロップ、カット、ヘアピン等によるネット前への返球をさせる。

③カット及びドロップの練習

切角うまいカットを行なっても球足が長ければいけない。ネットすれすれに落下する球足の短かい練習を行なわせた。

④バック・ハンドの練習

(1)スマッシュのバックリターンの練習＝バックレシーブのフォーム及びタイミングとラケットの握り方等、参加選手の最大の課題であり、欠点であったため一番時間をかけ最も重点的に練習を行なった。

(2)ハイバックハンドの練習＝動きのある中でのハイバックハンドに重点をおいた。だが、まだまだタイミングとスウィングに課題がある。

※短時日のため百科辞典的には行なえなかったが、概して良かったと思う。各自各校での今後の練習にすべてがかかっていることと思われる。

（敬愛高・脇坂安隆、東大阪高・佐藤茂雄）

予想外の収穫

フィルム・ビデオの観研

今回の高校選抜合宿で従来その例が見られなかった特色としてフィルムやビデオ・テープの利用をあげることができる。見ながらの解説、質疑応答で、文字通りの観研であった。

使用したフィルムやビデオは昨年六月のユ杯東京大会時のもので、16ミリのうち1巻は日本チームを中心にしたタイトル防衛までのトーキー20分もの。いま1巻は、チャレンジ・マッチを40分間にまとめた無声映画。ビデオ・テープはNHKが当日実況放映したもの（川端理事長の解説）であり、生々しく当時の模様が再現されるものである。（これからのフィルムやビデオは昨年11月下旬の全国指導者研修会にも利用し極めて好評を得た）

さて、全国の各地区からえらばれた代表達だけに、極めて積極的に合宿の内容を消化吸収してくれたのであるが、とりわけフィルムは無声、有声にかかわらず好評を博し、当時のタイトル防衛の感激をかみしめながら、世界的トップ・プレーヤーの心技両面にわたるプレーぶりをあらゆる角度から（視角・聴覚の両面からお互いのディスカッション、更に質疑応答などをおこなって）鋭意研究したのである。

これによる収獲は予想以上に大きかったと自負もしている。即ち、解散の前夜おこなわれたミーティングの際、参加者のほとんどがフィルムやビデオのことを話題にし「とても参考になった。これからの練習に際しての課題を掴むことができた。自分達も一つ一つの技術をマスターし、あんな選手になれるよう努力していきたい」等々とその反応ぶりを示してくれたのである。次に日本バドミントン協会現有の視聴覚器材を紹介して、大方の有効な御用を希望しておきます。（山陽学園高・毛利清志）

【フィルム】▼第6回ト杯東京大会（2巻、無声75分、貸出料二千円）▼第4回ユ杯ウエリントン大会（1巻、英語トーキー50分、同二千円）▼第5回ユ杯東京大会（2巻、無声80分、同二千円）ほかに第5回ユ杯大会トーキーもの1巻が今井監督の私物である。

【ビデオ・テープ】▼第5回ユ杯大会（2巻120分）

【その他】16ミリのフィルムが7、8巻あり、目下調整中。

全員参加のティーチインから

開けた〝新しい世界〟

生徒『井の中の蛙を痛感』

合宿最終日の前夜（1月14日）全員が参加して座談会が開かれた。

これは、いわば合宿の総まとめで、参加して感じたこと、勉強になったことの発表と、技術、心理、トレーニングなど全般にわたる質疑応答が、活発に展開された。

生徒たちは、さすがに現代っ子らしく卒直に発言、一方ではその話の中で、講師たちにとっても参考になるヒントも生まれるなど、遠井委員の巧みな司会とあいまって有益な会だった。ここで要点をまとめてお伝えする。

（伊藤基記、石崎喜代子）

合宿参加者名簿

◆講師　伊藤基記、毛利清志、遠井稔男、大世古吉弘、脇坂安隆、佐藤茂雄、石崎喜代子

◆生徒▽北海道江別高二年＝棚山和男、中川肇▽岩手県専大北上高二年＝阿部哲夫、高橋信夫▽東京都桐朋女高二年＝長谷川京子、鎌田美枝子▽栃木県真岡女高二年＝藤井幸子、大貫緑▽石川県金沢二水高二年＝石田紀子、松田京子

▽富山県藤園女高二年＝山森明美、一年＝恩田恵美子▽愛知県名古屋電気工高二年＝菱田修光、加藤保則、中村悟、阿部博▽愛知県名古屋女子商高二年＝大塚百合子、山田和子▽愛知県高蔵女子商高二年＝鈴木清香、堀正子

▽大阪府四条畷学園高一年＝西尾真理子、秋本八代美▽奈良県奈良市立一条高一年＝佐伯智子、古谷成代▽京都府成安女高二年＝岡崎幸子▽岡山県山陽女高二年＝石田雅子、吉田孝子▽熊本県熊本商大附属高一年＝寺本淳一、山田佳一

◆付添教師　▽出淵精吾（江別）小田島祐一、佐々木彦士（専大北上）竜井昇治、小山ときわ（桐朋女）奥村明義（金沢二水）池田信孝（藤園女）堀尾達也（名古屋電気工）亀井勇（名古屋女商）各務通則（高蔵女商）片岡輝明（四条畷）松尾良行（奈良市立一条）宇山保夫（成安女高）本郷節生（熊本商大附）

生徒の感想

1・トレーニング＝能率的にやること。基礎体力が不足していることを痛感。ナワとび練習が参考になった。

2・技術上の問題＝（イ）バックハンドがまだダメ。それだけに、ユ杯フィルム、ビデオで見た女子選手のうまさが目立った。高校では、初めのころフォアだけの練習に集中しがちということが残念。

（ロ）凡ミスをしない、ていねいにつねぐことの大切さ。

（ハ）なんでもかんでも振りあげるのでなく、プッシュをうまく使うことの大切さ。とくにリターンのさいのストローク。

（ニ）ダブルスのむづかしさパートナーのカバー。フィルムを見て、すぐれたコーナー・ワーク、むだのないフットワークなどを強く印象づけられた。

3・経験したこと＝

（イ）かねてとちがう、いろんな先生方から、幅広い角度で指導を受けた。新しい面が開けたような気がする。マンツーマンで技術的、心理的に行きづまるような場合もある。多くの人と練習、勉強することは非常に参考になった。フィルムを見たあとで、また先生方と練習の機会があった。目で見たことを、実験でき、その結びつきは大変ためになった。

（ロ）自分たちのレベルが客観的にわかった。はっきりいって、自分たちは井の中の蛙だったと自覚した。ムラのある自分を発見した。

（ハ）受け身にまわったときにポイントをとられる。それはフィルムでも感じた。攻撃は最良の防禦だと実感した。

（ニ）水鳥シャトルを使ったことがなく、とまどった。（北海道代表）

（ホ）男子との練習は相手にスピード、力があるので勉強になる。（女子の発言）

引卒者の感想

1・ウィークデーはなかなか学校から放れにくい。なるべく休暇中に実施して欲しい。

2・全日本級の模範試合を見せて欲しかった。

3・本間、湯木両選手の実際のプレーをまのあたりに見ることができたのは大きい収獲であった。

4・男子の選手にとっては食事が不足したのではないか。

5・引率者の勉強に大いに役だった。

6・充実した合宿であった。感激している。もってかえって普及に、レベルアップに尽力しようと胸をふくらませている。

7・バレーボールのセッターの「読」と通ずるものがバドミントンにもあるように思う。

8・日本のバドミントンは、今、本当に第一歩を踏みだしたところだ。女子の優位に慢心しないで、組織的にも、技術的にも躍進をする必要を痛感する。

9・課題を与えて、自習的に、向上をはかる面も強調してよいと思う。

10・昼の休けいが食事も含めて一時間しかないのは少し酷のように思う。

アガリは防げるか

苦しい追われる心理

主な質疑から

Q・（ユ杯フィルムを見て）あれだけのキャリアと力を持つ湯木選手でもアガった。なぜだろうか。

A・湯木選手の心境は実際複雑であったと思う。他のだれでも、あの立場におかれたら、あれ以上にみだれないとはいいきれない。

初対面の相手であり、しかも相当の強者として定評のあるミナルニ——。思いがけない試合順序からくる心の動揺、万余の自国の大観衆の前に、トップとして、是非とも勝たねばならぬ重責、そういう悪条件が重なって、湯木嬢の肩の上にのしかかったことは疑う余地がない。

逆にミナルニは、まけてもともと、勝てばまるもうけ、一勝負かけてみようということで、思いきった態度をとることができた。追われる方はどうしても固くなる、追う方はのびのびとやれる。この差が、あのスコアに現らわれたのではないだろうか。

途中で二、三発、湯木選手に自信を湧かせるようなラリーがあればもりかえせたと思うが、遂に本領の発揮するまでに至らなかった。しかし、今度当たったら勝つと湯木選手も言明している。苦しかった、残念だったが、湯木選手はもちろん日本のバド界にあれが一つの大きな勉強になったことは確かである。

Q・アガリをふせぐ、よい方法はないものだろうか。

A・これといったキメ手はない。ふだんの心構えとしては、タマシイのこもった練習をすること。自分の心の中に目標を立て、それを克服するようつとめる。これだけは絶対、相手に負けないというもの（脚力でもストロークの一つでも）を持つのも大切だ。

多くの場数を踏むこと、相手を知り、できるだけ情報、知識を集めるのも必要条件の一つ。人間は自分の経験しないこと予期しなかったことに出会うとあわてる。だから、できるだけ幅広く見たり、聞いたり、どん欲にものを吸収することだ。

Q・（フィルムを見て）ボクゾール組はこの前の全英No.1だが、あのうまさは、どこからくるのだろうか。

A・我々も自分が相手をして勝負したことがないので、ユ杯の観戦と、当たった選手諸嬢の感想と、フィルム、ビデオによる分析に頼る外はないが、そのサービスとリターンの際のかけひきのうまさ——ショート・サービスにうっかりラッシュすると、プッシュしてひっくりかえされるような気がするし、こちらのサービスのときはショートをやればラッシュされるし、仕方なしのドライブサービスを送ると、たちまちスマッシュ攻撃をうけるような圧迫感がある。——そのスタートのかけひきの負けが、ラリー全体にひびいてくるような気がするというのが相手をした日本選手諸嬢の共通した意見のようである。二人のコンビのよさ、前衛のリーチの広さ、などが相手のチームをまどわせる力でもあるようだ。体格も立派だし、打撃力も強い。



試合の波と山をつかめ

Q・（フィルムを見て）ウタミ×高橋のシングルスを見ていると、試合の流れの中に、波や山があると思う。その意味と心理について。

A・高校選手の心理的レベルの高さを示す、いい質問だ。楽に押しているとき、夢中でせり合っているとき、スタミナの心配がないとき、どうにでもなれと投げ気味で（これはよくないが）プレーするときは、だれでも、のびのびとプレーできるものだ。

ところが、あと何点だとスコアを強く意識したり、追いつかれてはいけないと焦ったり、スタミナがきれかかって苦しいから、早く逃げ込もうなどと精神的に追われだすと、今まで楽に打てたストロークが急に心もとないものになってくる。

たまたまラッキーなラリーがつづいて、この危機をうまく越えたり、一本、下手なミスをしたために深みにはまったり、試合中の心理は複雑である。――練習のときは自分が一番下手だと思ってハッスルし、試合になったら、自分が一番上手だと思って堂々とやれ――という言葉もあるが、いざというときに、この動揺の波にあふられて、てんぷくしないような精神力を、どうして養っておくか、が問題だ。





▲ 鬼よりこわい？　遠井先生の指導で基礎体力トレーニングに励む生徒たち

Q・関連質問だが、マッチ・ポイントを握っても、一本目で取ることは非常にむずかしく、逆にずるずる逆転ということも時々ある。その心理と対策について。

A・マッチ・ポイントの心理は前記の波の中の最高のものであろう。過去のユ杯、ト杯でも全英でも、全日本の大会でも、マッチ・ポイントをにぎりながら、固くなったり、焦ったりして、手中におさめたゲームを落した例は多い。ト杯東京大会（64年）ではコップス（デンマーク）がソニビル（インドネシア）に6から、タン（インドネシア）がニールセン（デンマーク）に9から追い上げられて、セッティングのすえ、貴重なゲームを失なった。

マッチ・ポイントを克服する

これは、あと1本という、気のゆるみと緊張のまざった複雑な気持ちになるからで、それに「きれいに、エースで決めよう」という心理も働く。したがってチャンス・ボールを待たず、どうしても無理しがちだ。しかしからだが、ふつうのようには動かないからエラーが出る。そこで焦る。

何度かにがい経験を積んで不動の自信をつけておくより外に道がない。どんなにピンチに追いこまれても捨てないで、苦しい息の中からでも何とか相手の弱点を冷静に見出して、一ポイント、一ポイント追いあげてゆくねばりが、いかに大切であるかを物語るものであろう。

Q・手首の強化法について。

A・これは、バドミントンをプレーするだれでもが逢着する課題である。荷重の原理によって、ビールビンを振ったり、テニスのラケットで素振りをしたり、エキスパンダーを使ったり、水や湯の中で、手首であおいだり、いろいろの方法がとられてきた。これらの方法によって確かに、手首を動かす筋肉は強化される。しかしこれだけに頼ると、手首をいためたり、かえってスイング全体の調和を破ることもあるから、あくまでも体全体の動きの中にうまくとけこませる工夫が大切。特に手首の可動性を高めるための柔軟体操的なものと辛棒強くつづけることが賢明だ。

基本の重要さを自覚せよ
たりないサービスの工夫

講師の助言から

1・ダブルスのスピードについてゆくには、ラケットを常にかかげてもつ心掛けが大切。だらりと、さげたままにしていたり、フォロー・スルーが大きすぎるのはよくない。

2・バードから眼を離すな。

3・ストレートとクロスの使いわけをすること。特にバックハンドに追いこまれて、ストレートにしか、リターンできないようでは致命的である。

4・ダブルスで、前後衛の間がなるべくひらきすぎないように。

5・何でもかでも大上段にふりかぶってはいけない。時に応じてノーワインドアップで胸からラケットを突きだすようにして処理する。ボクシングのジャブのような打ち方を身につける必要がある。

6・カミソリで大木はきれない。従って力もなければ、スタミナもない、正確さもないのに、小細工だけ早くおぼえ、こまっちゃくれた技を使うのはよくない。

正確で力強いスマッシュ、真直に目的の方向にとんでゆくクリヤー、安全に相手の足もとをつくドロップ、自分の方に頂点をもって相手の攻撃にさらされないヘアピン、それらに応ずるリターンというような基本的ストローク、フットワークを、孤独で単純な毎日のくりかえしの中に、徹底的に身につけておく心掛けが大切である。

7・サービスに左右の変化がない。馬鹿の一つ覚えで、同じようなところに送って、同じようにたたかれるのはよくない。サービス・コートの四隅を完璧に守れるものではない。その四隅のうちのどこかに相手の弱点があるはずだ。それを発見して、そこに正確なサービスをタイムリーに送れるようになることがダブルスの第一歩だ。日本では全般的にサービスの研究が不足している。

8・今度の合宿で、基礎的なトレーニングや、基本的なストロークがいかに大切であるかがわかったことと思う。

9・時間もコートも充分であるという環境は全般的にのぞむべくもない。コートがあくまで、短時間で能率的なトレーニングを規則正しく、かつ重点的に行なう計画、コートを活用して能率をあげる工夫、一人でもやれる練習、生活全体で、バドミントンと取り組む心掛けが大切である。

10・ハイ・バックハンド・ストロークのスイング、そのタイミングはなかなかむつかしいが、これからのプレーヤーは男女を問わず、これをマスターしておく必要がある。

親指のあて方にいろいろあるが、手首の動きをきゅうくつにしないで、力がいれやすいという自分に適した握り方を発見することである。

うまいプレーヤーのストロークを見ては打ち、打ってはみる心掛けが大切。スイングはなるだけ短かく、体のひねりが限度をこえないように、体の反りかえり、足の踏みこみとうまくタイミングをあわせることがコツであろう。



創刊号は売り切れ、絶版

バックナンバーのお知らせ

毎度、ご愛読いただき、ありがとうございます。

第○号を欲しい――こういうかたちで注文してくる読者の方が、かなりおられるので、ここで、バックナンバーについて、お知らせしておきます。

残念ながら、創刊号は、全部なくなりました。

いまだに創刊号をご注文の方もかなりの数に上るのですが、すでに協会の保存資料用として少数があるだけとなりましたので、お分けすることは不可能です。あしからず、ご了承下さい。

なお、雑誌としての本来の編集は、すべて第2号以降の主な内容を、ここにまとめておきます。ご入用の方は、各号とも、少部数ずつ、ストックがありますお早目に申し込んで下さい。

▼第2号
①ホープ（柴山きよ子）
②学校訪問（金沢市立工）
③国際学生選手権、44年度全国高校、教職員選手権
④卜杯対香港戦
⑤職場訪問（警視庁）

▼第3号
①人物スポット（高坂薫）
②職場訪問（横浜消防局）
③湯木選手の中学時代
④ママさんバドミントン
⑤サッカー・ブームの舞台裏

▼第4号
①国体詳報
②全日本学生選手権
③ヒーロー（本間順次）
④中学指導者講習会から「スポーツと心理学」（第5、6、7号）。「ルール百問」は第3号から連載しています。

▼第5号
①全日本総合選手権
②女子選手の総合体力
③ヒロイン（湯木博江）
④全国青年大会

▼第6号
①全日本女子チャンピオンズ・トーナメント
②関東教育系学生選手権
③ユ杯に朝日体育賞
④70年代、期待の新人
このほか「科学的にみたバドミントンの魅力」（第3、4号）

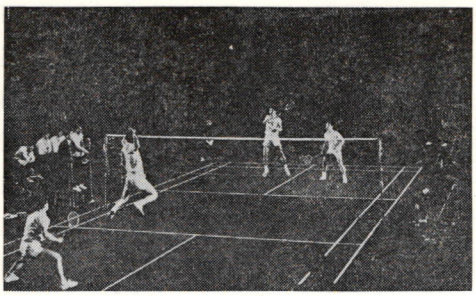


第4回社会人・学生対抗競技会

小島らト杯代表の貫禄

（1月15日・東京電機大体育館）

学生陣、栂野尾の1勝だけ



社会人4（単2―1、複2―0）1学生

▼シングルス

○秋山（秋山紙店）2（15―12、15―9）0谷口（立大）

西野（ニシヤ）1（14―15、15―8、15―5）2栂野尾○（法大）

○小島（ヨネヤマ）2（15―13、18―15）0本間（中大）

▼ダブルス

○秋山・小島2（15―4、15―12）0森・池田（法大）

○堺（カワサキ）・西野2（15―5、15―3）0今泉・岩下（中大）

☆　☆　☆　☆

【秋山×谷口】評　第1ゲーム秋山リードの後、谷口追い込み12―12となったが勝負はそこまで。第2ゲームも秋山14―6とし追いすがる谷口をかわしてまず危なげなく一勝。

【秋山】全盛時に比してダッシュ力の低下は止むをえまい。フォアのネットで谷口に再三、名をなさしめたとはいえ、正確なプレースメントは少しも衰えず左右のコーナーをいっぱいに攻めて、試合運びでも息のぬき場、点のとり場を充分心得えていて安心。何よりも旺盛なファイトがみなぎって元の彼に戻っていたのを見て満足だった。

【谷口】きびきびして、さすが本間に次ぐ有望新人の面目通り。腰が固いこと、R・S・Lをモノのにしていないことが敗因。経験をつみ大物に育てたい。（日本協会副会長・森友徳兵衛）

【栂野尾×西野】評　学生陣に貴重な一勝をもたらした栂野尾は、試合前から自信満々であった。それには数次にわたるトマス杯合宿で西野攻略法を研究した裏付けがあったのだろう。

第1ゲームは淡々としたスタートで始まったが、常に先に攻撃を仕掛けた西野があっけなくこのゲームをものにした。

第2ゲームに入ると栂野尾はようやく本来の調子をとりもどし、深いクリヤーで西野を左右にゆさぶり、一進一退の攻防となったが、スマッシュ、カット、フェイントと、多彩な攻撃をおりまぜた栂野尾が結局は押し切り、ゲーム・カウントをタイとした。

第3ゲームもすっかり自己のペースに乗った栂野尾は、後半やや疲労の見えた西野を前後左右にほんろう圧倒した。幅のある栂野尾の攻撃と、単調なる西野の攻めが差となってあらわれた一戦である。（広報委員・秦浩）

【小島×本間】評　ト杯最終合宿を終えたばかりの両者だったが、本間わずかに仕上りが遅かった。しかし第1ゲームは本間スマッシュ、ドロップを多用し、小島を泳がせ13オールのセッティング。先制のチャンスを迎えたが、ここで自滅、1点もとれず18―13と敗れた。

これに対し小島は気力、体力充実し、緩急自在のたくみなタマさばきで若い本間をしっかり押え込んだ。日本のエースを自覚しているだけに、早くも対インドネシアに焦点を合わせた。完璧な試合ぶりが見事だった。本間、次代を背負うのに、いま一歩の修業が望まれる。（ト杯コーチ・福井正康）

【秋山組×森組】評　学生組は期末試験中とあって、冴えが見られなかった。とくに森は散発的にネット際のラッシングを見せたかと思うと、凡ミスが出るというわけで、15―4と見ばえ



捕えた〝二匹目のドジョウ〟

新春第2弾！と銘うったこの競技会、1月4日の女子チャンピオンズ・トーナメントの向うを張って男子のみが出場。その女子大会の観客動員法で味をしめた関係者一同、柳の下のドジョウを狙って発送した案内状も〝トマス杯代表がゴッソリ出場！〟というキャッチ・フレーズ。会場がなじみの薄い電気大体育館ということで見通しは悲観的ではあったが…。

いざフタを開けてみると、いたいた、柳の下にドジョウ（失礼）がいたのである。関係者の心配をよそに約三百名近くの入場者があり、まずはヨカッタネと背をたたきあったしだい。

裏方さん、ありがとう

いつも華やかなスポットライトを浴びるのは選手たち。

しかし、その陰で汗して準備に奔走する裏方さん（主に学連諸氏）達の労苦を忘れてはならない。

のしない第1ゲームが終った。第2ゲームもずるずるかと心配されたが、中盤ごろからエンジンがかり、森の攻撃、池田のつなぎにいつもの調子が出、激しいラリーとなった。

もともと秋山・小島組にも決定打が乏しいきらいがある。学生陣にミスがなければ、ゲーム・オールにもつれる可能性があったが、最後のしめくくりがないまま、社会人組に押し切られてしまった。（指導委員長・伊藤基記）

【堺・西野×今泉・岩下】評

スコアの上からはあらためていうこともあるまい。学生のわさもベテランに通じなかった一戦だった。

ゲームは、どちらかというと単調に進んだ。スコアほどには一方的という感じを抱かなかったが、やはりダブルスの神様みたいな堺選手の計算ずくの試合運びが、ほめられてよかろう。前のゲームで小島・秋山組が、上背のある学生組に苦戦し、盛んにフライを余儀なくされていたのに比べ、ドライブの多用で難なく勝った。

今泉・岩下組は、学生ナンバー・4だが、総合でも社会人に二回戦で敗れた。シングルスにおける個々の力はあるのだから、今後はうま味への精進が望まれる。（広報委員長・牧野武）

トマス杯を目前に控えているだけに出場した十一選手中、トマス杯代表六選手の動きが期待された。が〝この一戦〟を前にしたチームにしては度重なる合宿で鍛え抜いたという、ピリッとした緊張感もなく、各選手の技術にもとりたてていうほどの成長は見られなかった。

「インドネシア戦のカギはダブルス」―小宮監督以下チームはこう対策を話していたが、肝心のダブルスにまだまだ不安を感じさせられた。この日の試合は社会人×学生対抗となっているためトマス杯のペアは小島・秋山組だけだったが、スピードに欠け、スマッシュの角度に鋭さがなかった。

落下点はコート中央が多く、ネットに対し鋭角にきまりライン際という攻撃として生かされたスマッシュがあまり見られなかった。秋山は六十五年、全英選手権に準優勝した全盛期の力はなく、コントロールのよさはあっても前後への動きに衰えがあらわれていた。西野と組んで出場した堺にはベテランのうま味を期得したが、ダブルスに徹している割には、まだまだ力に頼ったような試合はこびが見受けられた。本番では本間と組んで第二ダブルス出場と思われるが、本間が初出場というハンディを背おっているだけにゲームはこびの一歩先を読んだ好リードをしてもらいたいものだ。

シングルスは梅野尾に著しい進歩が見られた。ゲームが慎重になり、合宿中、先輩選手にもまれたあとがうかがわれた。小島の次を継ぐ選手といわれて久しい本間は、小島に対し一ゲームも取れないまま敗退。トマス杯では日本選手に勝つのが目的ではないとしても一度でも全英選手権ベスト　で日本チャンピオンの小島に勝っていれば自信もつき、初出場という精神的不安が少しは柔らぐと思われるのだが…。

トマス杯代表選手以外では立大一年、谷口の新人らしからぬ落ちついた試合ぶりが注目された。長身で体格に恵まれのびのびとしたプレー、大型選手への素質をのぞかせていた。

報知新聞
吉広紀代子

観戦記

国際試合を自分の目で見るチャンスもなく日本選手を期待はずれときめつけるのは片手落ちかもしれないが、国際試合の記録や外国選手の動きを外電で追っている限りでは日本選手ばかりでなく六十年代後半、どうも男子は技術的に停滞気味だったようである。

インドネシアはルディ・ハルトノというスター選手の出現で一応、活気づいているようだが、ベテラン引退と合わせるとプラス・マイナス零。タイは新人も出ず、ヨーロッパにも新しい選手が出ていない。国際的に指導者がいないというのが共通の理由のようだが、マレーシア、インドネシアといった同類型の選手で代表される国が交代でチャンピオンになっていることも一因ではなかろうか。

日本の女子が六十年代後半、突然、国際舞台へデビュー、バドミントンを社交的なクラブ競技からスポーツそのものに変えたように、新しい国がチャンピオンとなって技術的にも従来のカラを破れないものか。

大きな期待を抱きながら男子のトップ・クラスのプレーを見ていると、ふっとこんなことを考えてしまった。一方では目に見えるほどの大きな進歩がそれほど簡単になしとげられるものではないと思いながらも…。

この大会でも会場の選定が二転三転、その度に会場におもむき借用願を提出したりひっこめたり。やっと決まりかけてもTV中継に不適ということでまた他をあたる始末。だんだん日時が迫ってくるのでイライラ。

やっと探し当てたこの会場もビルの七階、試合開始の数時間前から寒風をついてトラックの荷台に乗って運んできた、二百㌔はあろうというコートマットを、せまい階段でスイッチバックを繰り返しながらエッチラオッチラかつぎあげ、やっとのことで設営完了。この間じゅう選手はただまってこの光景を見ていただけ。

チョットぐらい手伝ってくれてもいいのに…。選手の皆さん少しは反省してネ。

ズラリとおえら方

この競技会には川端理事長をはじめ国体でもお目にかかれぬほど多勢の日本協会のオエラ方がズラッと顔を並べた。それも道理、来るべきトマス杯に備えて当日は午前中から体協で常務理事会が開かれ、出席した面々が大挙押しかけスタンドをうめたのである。

これには百戦練磨の出場選手たちも緊張のおももち?!

技術講座

百万人のバドミントン上達法

連載

上級編 ⑤ 〈続〉 サービスの重要性

徹底欠いた本間のサービス

…全日本総合選手権から…　毛利清志

(三) **男子単決勝**（小島―本間）

昨年度と同じ顔ぶれで決勝を争ったわけだが、女子の場合にくらべて大きな変動は感じられない。また小島君の総合単における4連勝は、前人未踏の偉業であり、そのたゆまぬ努力に敬意を表したい。

本間選手も各種ストロークが昨年より一段と良くなっていて安定感が加わり、サウスポー独特のプレーを生かしての試合ぶりは逞ましさを感じさせてくれた。

さて、本間選手は対小島戦に於てロング・サービスとショート・サービスを併用していたが、彼のロング・サービスは筆者にとってはどうにも理解に苦しむものであった。

即ち、ハイ・サービスと呼ぶには高さがなく、ドライブ・サービスというにはスピードとモーションが極めて甘く、一体サービスについて考えたことがあるのかな？と思わざるを得ないものであった。

即ち、本間選手自身は小島選手のロング・ハイ・サービスをレシーブするときに、バック・コート一杯にさがって、しかもその外足はしばしばコートの外に出る程であったのにくらべ、小島選手はずいぶん前よりの位置（ときにはダブルスのロング・サービス・ラインよりも更に前の方）で本間選手のサービスを処理しているのである。

そのために、本間選手がときどき試みるショート・サービスもその効果が半減（またこのショート・サービスが大きくて…）していたように思う。

試合中のラリーを見ていても本間選手はオーバー・ヘッド・ストロークのハイ・クリヤーは皆無に等しかった。従ってサービスにおいても小島選手は常にバック・コート、ギリギリまでさがらなくてもよいのである。

別の表現をすれば本間選手は自分のコート内を100％走っているのに、相手の小島選手は85％～80％位しか走っていないのである。これではスタミナの消耗度の違いは火を見るより明かである。

朝10時からおこなわれた複の3決で楽勝し、疲労回復十分の本間選手が、約1時間前に複の決勝をファイナル・ゲームで終えたばかりの小島選手に対し、第1ゲームを先取しながら、第2ゲームは完全にバテ負け、第3ゲーム前半はややよかったが後半は完全に動きが鈍り、小島選手のペースだった。

筆者は、前年の両者の決勝のときにも同じことを感じ、更に大阪での学生単決勝時の対西野戦、東京の国際学生単決勝時の対アイク・モン（マレーシア）戦などでも全く同様の想い出がある。

一度ご本人に聞いてみたいと思いながら不幸にしてそのチャンスに恵まれないで現在に至ってしまったのであるが、近い将来話し合えることを楽しみにしている。

アイク・ハンととてもよく似通ったプレーぶりでロング・ハイ・サービスとコート一杯のクリヤーがすばらしく、その2種類のストロークの差で、本間選手が敗れたように考えるのは一人筆者のみではなかろう？。

本間選手が完璧なロング・ハイ・サービスを体得し、ハイ・クリヤーとドリブン・クリヤーの完全な使い分けができるようになったら、飛躍的にスケールの大きい国際的プレーヤーに成長するものと信じ、そう望むものである。

湯木・高橋両選手のロング・ハイ・サービスは、最もすぐれているように思われるので（好調なときの両者は、このサービスさえ成功すれば、どんなにするどいアタックでも実に軽々とあばいている）読者の皆さんも参考にして大いに研究していただきたいと思うのである。

（この誌上を借りて話題をご提供いただいた各位に厚くお礼申し上げます。）

第一回女子チャンピオンズ・トーナメント

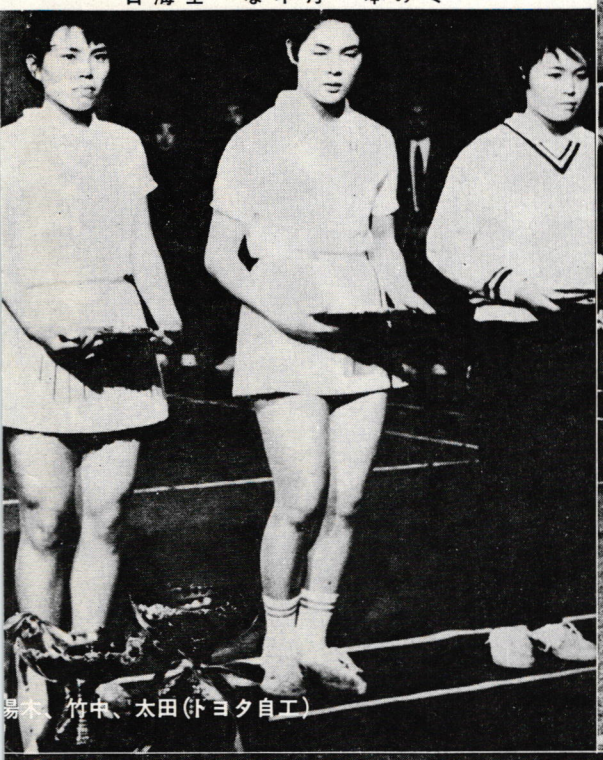
・・は・い。ら・い・と・・

「目がいい」と、だれかがいっていた。なるほど、これは〝勝負師〟の目だ。
竹中悦子（新潟青陵短大）

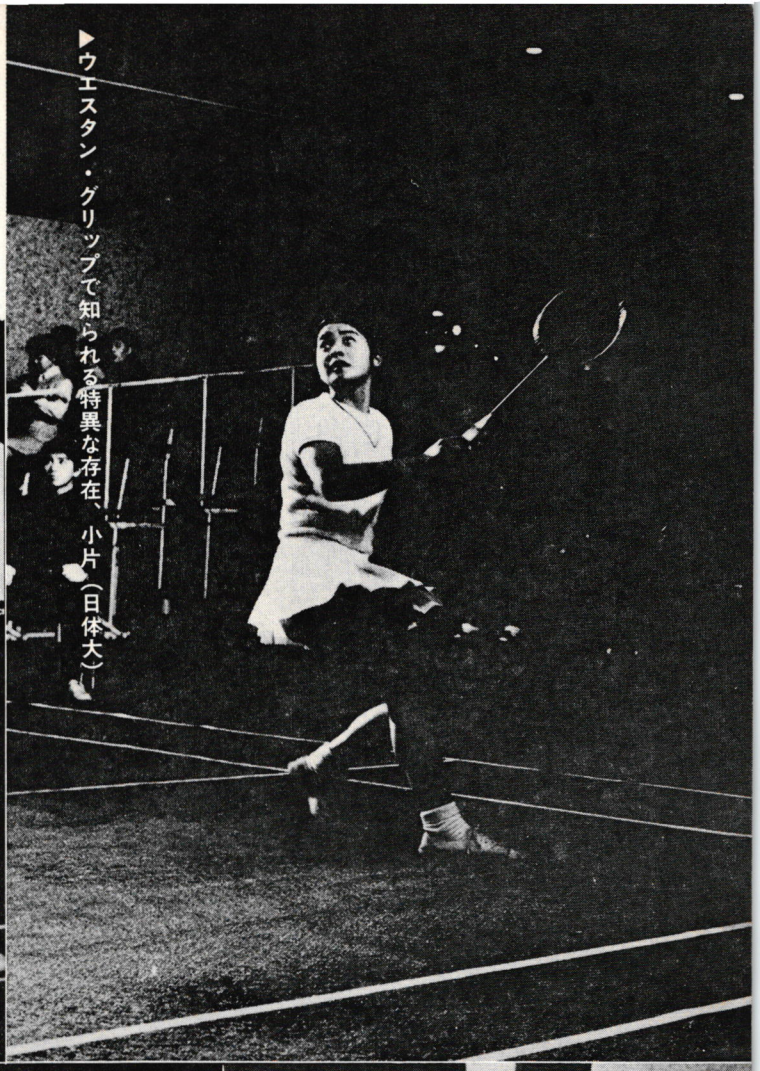
ャンピオンズトーナメント

既報、日本のバドミントン史上、初の試みである、「第一回全日本女子チャンピオンズ・トーナメント」が一月四日、東京12チャンネルのテレビ中継で行なわれた。

残念ながら、高木（全日本教職員優勝、東海女短大）と相沢（全日



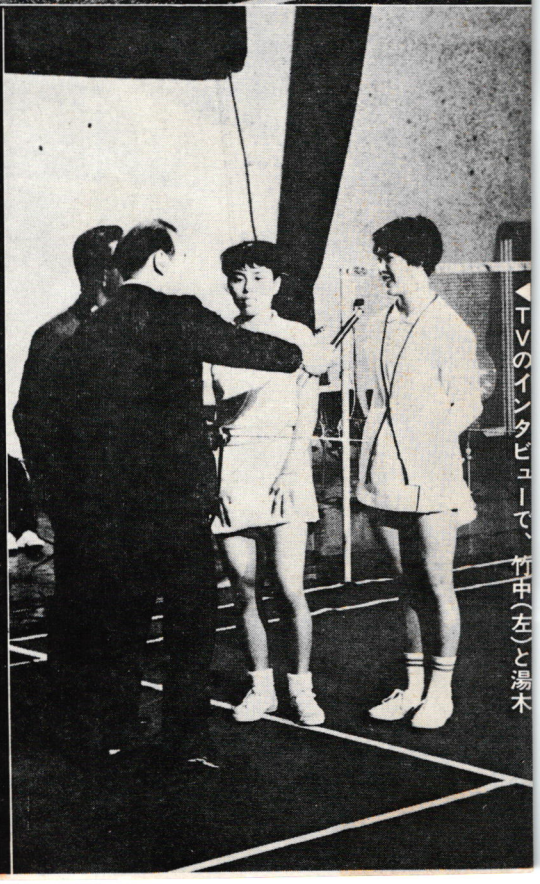
湯木、竹中、太田（トヨタ自工）



▶ウエスタン・グリップで知られる特異な存在、小片（日体大）



▶両手に花——森友副会長杯と12チャンネル杯を手に喜びの湯木（日女体大）



▶TVのインタビューで、竹中（左）と湯木

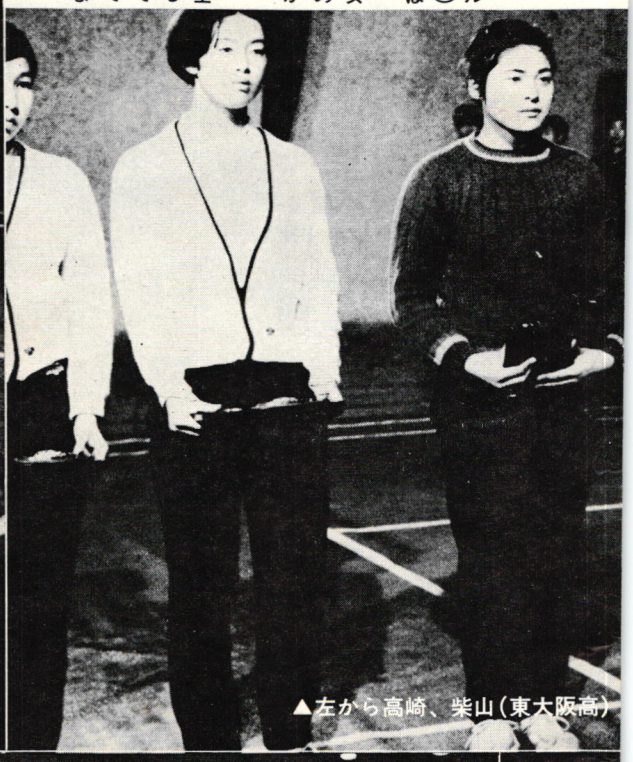
第1回 全日本女子バドミントン

本、全日本学生ダブルス優勝、新潟青陵短大）の欠場で、スケールは小さくなったものの、高校生二人を加え〝女王の中の女王〟を決めるこの大会、なかなか活気があった。

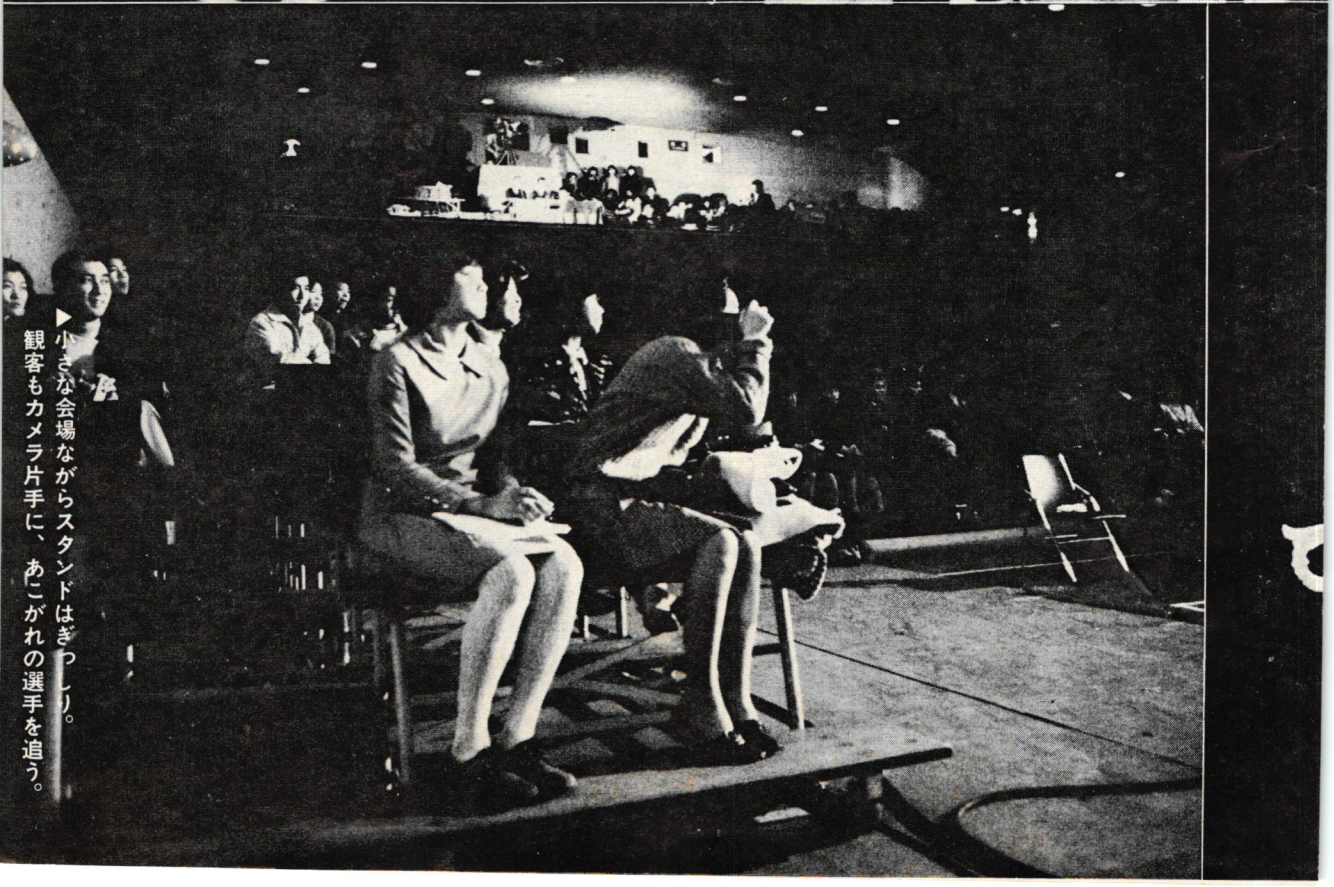
次回からは、選抜、招待される選手が、全員そろって参加できるよう、そして、男子でも、この種の催しができるよう、祈ってやまない。



▶未来の大器といわれる柴山オリーブちゃん（東大阪高）



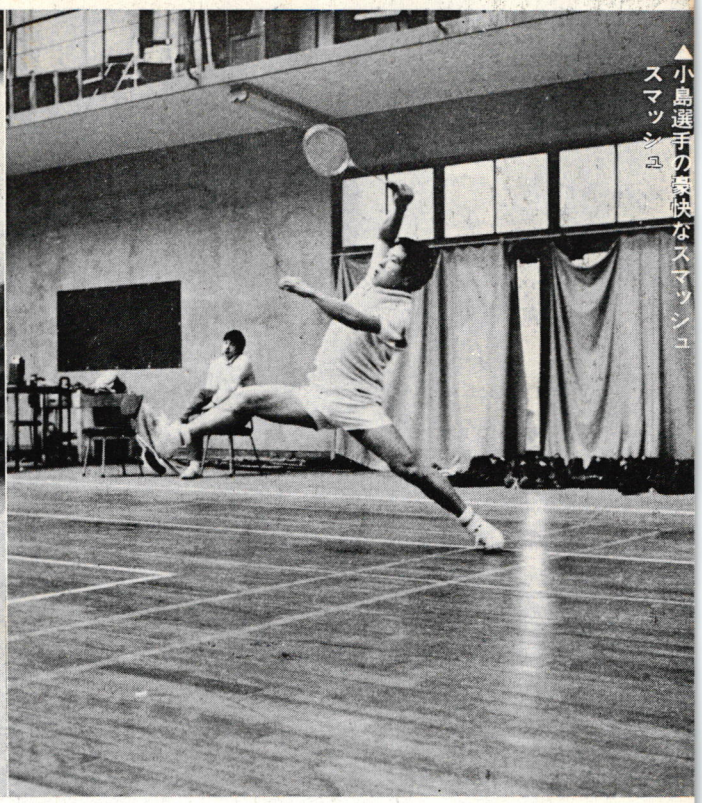
▲左から高崎、柴山（東大阪高）



▶小さな会場ながらスタンドはぎっしり。観客もカメラ片手に、あこがれの選手を追う。



▲本間選手は無念無想の境地？



▲小島選手の豪快なスマッシュ

ト杯合宿のスナップから



小宮監督（左端）らチーム▼



ああ、疲れた？西野選手▼（右）、秋山選手（その左）はリラックスムード。

中高校編 ⑥

サーブが試合を制する
相手を迷わせ先手をとれ

遠井稔男

今回から、いよいよ技術編にはいろう。まず、サーブから。

バドミントンの試合を見ていると、力の同じくらいの選手同士の対戦では、往々にしてポイントはふえないが、サーブ権だけのくり返しで大接戦になったり、四、五点はまたたく間に連続ポイントをとったりすることがしばしばである。

これはバドミントンがテンポ調の競技であるからだと思う。いかにテンポに乗るかが、勝つ秘訣であるし、逆にいえば、いかにして相手のテンポをくずすかが、勝敗の鍵である。

このテンポに乗せ、相手のテンポをくずす武器が一つにサーブであると思う。ここにサーブが単に試合をする時の一番最初のプレーであるとか、直接ポイントに結びつくプレーであるとかだけでなく、試合全体の流れを制する非常に重要な役割を果たすことであることを私は強調したい。

サーブで勝負の六〇～七〇%は決まるとも考える。上手なサーブを入れて、相手がどんな強い攻撃力をもっていても上手なサーブを入れて、その力を発揮させないことなどはこれほど簡単明瞭なことはない。これほど重要性を持つサーブが日本の選手は下手であり案外、研究されていない。ここに日本のバドミントンがまだまだ躍進の道を残しているとも考えられる。

「入れればいい」ではダメ

今までわれわれはサーブに対しては「ミスしないで入れろ」主義で指導をしてきたが、これを改め、サーブで相手を迷わし先手をとる、できればサーブで直接ポイントをとるという前向きの姿勢で指導して行きたい。

サーブをもって相手の能力、特徴も見ぬくことができるようにし、研究も深めなければならない。そして変化のあるサーブの出現を驚くと同時に、強い警戒心をもってサーブに対処させたいものである。

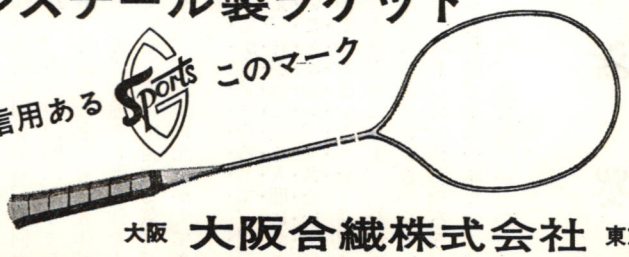
バドミントンのサーブは非常に重要な一つの技術であり、次の様な特徴があり魅力がある。

◎サーブは得点に結びつく
◎サーブに対する規制が厳格である
◎初打はともに攻撃的でない
◎心理的掛け引きが自由にできる
◎サーブは時間的に余裕があり集中できる
◎サーバーは静的でありレシーバーは動的である

以上の特徴を十分理解し、サーブの技術を研究していかねばならないが、バドミントンの技術の進歩はサーブに一番開拓の余地があるように考える。

次の点を、十分、注意して練習しよう。

◎サーブの時、手首のスナップの入れ方、ショートサーブ、トリブンサーブ、ロングサーブ
◎ラケットの打面（角度）の使い方を工夫する。フォワードサーブか、バックサーブか、サービス・コートの前か後か。リーチの長短
◎サーブのルールの許す範囲で、出来る限り高い点でシャトルをとらえる
◎ねらったところに正確にコントロールする（高さとスピード）
◎呼吸をうまくとって相手のタイミングをはずし、フェイントをかける（呼気、吸気など）
◎サービスの体勢をとったら手元をよく見て、相手の視線をつぶす。

日本で最初のオールスチール製ラケット
信用あるSPORTS このマーク

大阪 大阪合繊株式会社 東京

きみも上手になれる
〝やる気〟が努力と自信のもと

伊藤基記

今日は中学生諸君を対象にお話しをしておきましょう。もちろん小学校の上級生でも真剣にとり組んでいるものなら私のこれからの話を読んで〝オレもやるぞ〟〝私もがんばろう〟と思うにちがいありません。

バドミントンに限らず、どんな運動でも〝自分は上手になるだろうか〟〝勝てるようになるだろうか〟という考えがだれの頭の中にも生れてくると思います。とくに皆さんのような少年少女のころには感情が新鮮で、起伏が激しいものですから、おたがいの競争の場で、勝つと、〝僕は強い、うまい〟と浮き浮きするような気持になったり、反対に負けると〝私はダメだ〟と悲観してしまったりします。急にバラ色の希望がわいたり、失望のドン底に沈んだりするのです。

毎号この紙上で、えらそうなことをかきつづけている伊藤先生も、少年時代はこんな浮き沈みの気持をたくさん味わいました。

今から考えますと、あんな気持があったから、スポーツを楽しんで元気でこられたのだということに気付くのですが、その時には随分苦しい思いをしたものです。

たしか、昭和九年の夏であったと思います。大分で行なわれた中等学校（今の高校大会に当たる）の西日本大会（軟式テニス）のときだったと記憶します。その前の年の下関の大会で、優勝戦で敗れていましたので、今年こそと意気込んで試合にのぞみ、本当に破竹の勢で優勝戦まですすんでいました。

その優勝戦も7回ゲームのうち、3ゲームをストレートでとり、ファイナル・ゲームも3－0とリードして、マッチ・ポイントを握りました。何個も置いてある、優勝旗やカップ、タテを私は横目でみました。悲願達成はもう手のとどくところまで来ているのです。

私はスマッシュをしました。それがほとんどオン・ラインだったと思ったのですが、審判はアウトを宣しました。〝よしあとワン・ポイントだ〟とこのときまでは、まだ気持の余裕がありました。ところが、その次には、後衛のS君がネットしました。早くワン・ポイントとらなければジュースだとあせる気持で、私はずるずるととびだして左を抜かれました。

ついにジュース、今まではワン・ポイントとれば……だったのに、2ポイント連続でとらねば、カップは手に入らなくなりました。今まで気軽に動き、気軽に打っていたのが、急に自信がなくなったようで、一球一球が薄氷をふむようだとはこのことでしょうか。

何回もジュースをくりかえしているうちに、何回かマッチ・ポイントを握ったのですが、すっかり心の余裕を失った私達ペアは、とうとう3－4と逆転されてしまいました。

あのときのあのスマッシュがあのときのあのストロークが、と夜も眠れぬような日がつづいて、多感な私は今でいうノイローゼのようになって裏街をうろつきました。

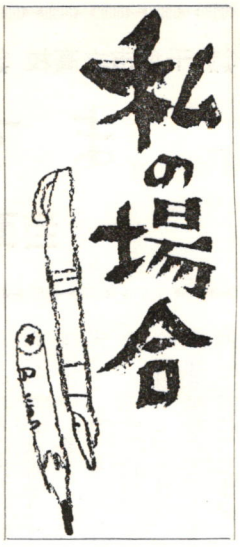
ところがある日、私のこの苦しみを一挙に救うような神のおさとしがあったのです。

私の家の近くの暗い小道で、笛をふき、杖で道をさぐりながらくる〝按摩さん〟とすれ違いました。その時、天の啓示のように私の頭にひらめいた考えがありました。このめくらの按摩さんは、テニスに勝てない、いや負けることさえもできない。それでもこの寒空に客を求めて夜道をあるいている。お前は五体満足な体を両親からもらいながら、たった一回、きわどい試合でまけたからといって、ゼイタクな〝残念病〟にかかっている。自分の力をタナにあげておいて、ああすれば勝てたのになどと、かえらぬくりごとをならべて、自己弁護をしてノイローゼになっている。見苦しいぞ!!

その瞬間から、私は別人のように、やる気がでてきました。それからも何回か勝ち、何回か敗れて、多少の凸凹はありましたが、どんなときでも、五体がそろって、普通の人間の体をもっていることに感謝する気持がわくと、不思議に元気がでてきました。

手足が満足にそろって、眼が見え、耳がきこえる人間にできないことはない、できないのはお前がやらないからだ。手足の不自由な人々の分も、自分達でがんばるのだといいきかせています。バドミントンをやろうと思うことができる少年少女の皆さん方は、恵まれているのですよ。

私の場合



読切連載
【第6回】

ふところで暖めたラケット
ほしい青春の〝ひたむき〟さ

慶大OB
東急エージェンシー勤務
岡道明

バドミントンと袂別してもう随分となる。昨年、ユーバー杯の決勝戦を見て「やはりバドミントンはいいものだ」と久しぶりに血が躍るような気がしたものだ。

そしてまた、私がバドミントンをやっていた当時と比較してまさに「今昔の感」があったことも否定できない。一万人もの観客に囲まれ、見つめられるようになったバドミントン。私にとっては夢のような出来事としかいいようがない。

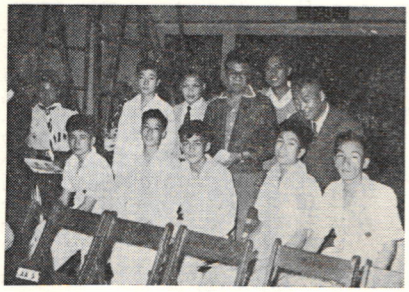
私がバドミントンを始めたのは昭和二十四年のことである。関東学院は当時、全国制覇をした名門だっただけに、練習もきびしく、それだけにまた張りもあった。

バドミントン界の長老である広田兼敏さんのご子息である広田敏秀さんが私の先輩で、横浜に住んでいたせいもあってよくご指導を願って。YMCAでは小宮淳宏さんにも教わった。

インターハイで優勝したうれしい思い出もあるが、やはり、慶応にはいってインカレで優勝した時の方がうれしかった。

私の後輩には越川啓君のほか立教OBの佐藤芳朗君がいた。

佐藤君は非常に達者なシングル・プレーヤーで、関東学生の決勝で彼に負けた口惜しい記憶もある。



前列中央が岡氏▼

そして佐藤君たちと一緒に、トマス杯の対香港戦にも出た。

試合には破れたが、これまた楽しい思い出である。

ユーバー杯に刺激されて、私も先日、十年ぶりにラケットを握った。早慶のOB戦で、越川君とペアを組んだが、巧い越川君にすっかりオンブにダッコというていたらくだった。

これからは市民のスポーツのつどいなんかにも積極的に出てバドミントンとの旧交を温めたいという心境にあるが、それはさておいて、私自身がバドミントンをやり、ほんとうによかったと思うことは、団体生活を通じて、人間関係の成りたちを勉強できたこと、そして月並な表現だが〝根性〟を植えつけられたということだろう。

私たちの頃の競争は激しく、ちょっとくずれるとレギュラーからはずされた。私は慶応の商学部出身であるが、それこそ、「バドミントン学科」を卒業したような感じがする。

苦しいはずの練習も試合も、全然苦にならない体力をつけてくれたのも、バドミントンであり、少々のことでヘコたれない根性をつけてくれたのもシャトル・コックのおかげである。

昭和三十四年から四年間、私は慶応の監督をつとめたが、それらの経験と通じていえることは、現在の学生たちもふくめた選手たちが、なにかバドミントンに打ち込む、ひたむきに欠けているような気がする。

私は雪の降る寒い日、ガットがゆるむのを恐れて、ラケットをふところに入れて温めた記憶がある。

それはただ単に私だけに限らないが、文字どおり寝食を忘れ、夜を徹してバドミントン論議を続けたものであった。

いま考えてみれば、よくやったとしかいいようがない。たしかに当時としてはバドミントンのほかに、なんの楽しみもなかったことは事実である。それにくらべれば、いまはほかにいろんな遊びも楽しみもあり、目が奪われ、心が移ることも多いだろう。

そうしたことが、バドミントンに打ち込むひたむき欠如につながっているとすれば不幸なことである。

女子はたしかに世界一に成長したが、男子は未だしの感がある。

なにもなし得なかった一OBとしては、たしかに口はばったい、いい草になるが、私は、そうしたことばを、現役の選手諸君に贈りたい。

苦言を呈して恐縮だが、いまの私のいつわりのない心境である。

いずれにせよ私にとって、いやそれはバドミントンをやった同じ世代の人間にとっては、みんな「バドミントンの虫」たちであったはずだ。

その虫のためごととられるかも知れないが、ひとつのことに打ち込むことの大切さを、ここに強調しておきたい。

学校訪問

☆☆ 千葉市立高校 ☆☆

まず基礎体力を

当面の目標はインタハイ出場

千葉市郊外の小高い丘の上、早春の日が大きく西に傾いたというのに、千葉市立高校の体育館は少しの寒さも感じない。

午後四時、授業を終えた部員たちが集まってきた。卒業間近かで退部した三年生をのぞく男女二十四人。「イチ、ニー、イチ、ニー」キャプテン菅沢君の号令で、まず入念な準備体操、これが終ると二年生は広いフロアの一角に二面とってある専用のコートに散り、そして一年生たちは、さっと校外へ姿を消した。

新人は、ここではコートにいれてもらえないのだ。「千葉県では中学校のバドミントン部はまったくありません。だから入学したときは、ずぶのしろうと。従って体力づくりからやる必要があるんです。しっかりした基礎を身につけておかないと、将来のためになりませんから…。千葉県協会の理事長をやっている高橋重夫監督（生物の教師）はなかなかきびしい。

校外にとび出した新人たちはたんぼのあぜ道をまず五㌔のランニング、多いときは十五㌔も走るという。そして休むひまもなく、七十三段ある学校の階段をかけあしで十往復。さらにあらゆる種類の素振りを合計五百回。ときには、三十㌔のバーベルを手にすることもあるという。

こうしたハード・トレーニングに耐えてきたせいだろうか。コートに帰ってきた新人たちには、バテたようすはまったく見られない。コート内での練習でも、新人当時のスタミナづくりがものをいってか、二時間半の練習は終始、同じペースで進められている。

千葉市立高は、さる三十四年にできた新設校。バドミントン部ができたのは、三十七年。まだあしかけ九年の歴史しかない。開校と同時に、当時県内で最も強かった木更津東高から転任してきた高橋先生が中心となり、部員十四人でスタート。頭初は体育館もなく、強風のふきすさぶ中でトレーニングに明けくれた時代もあった。

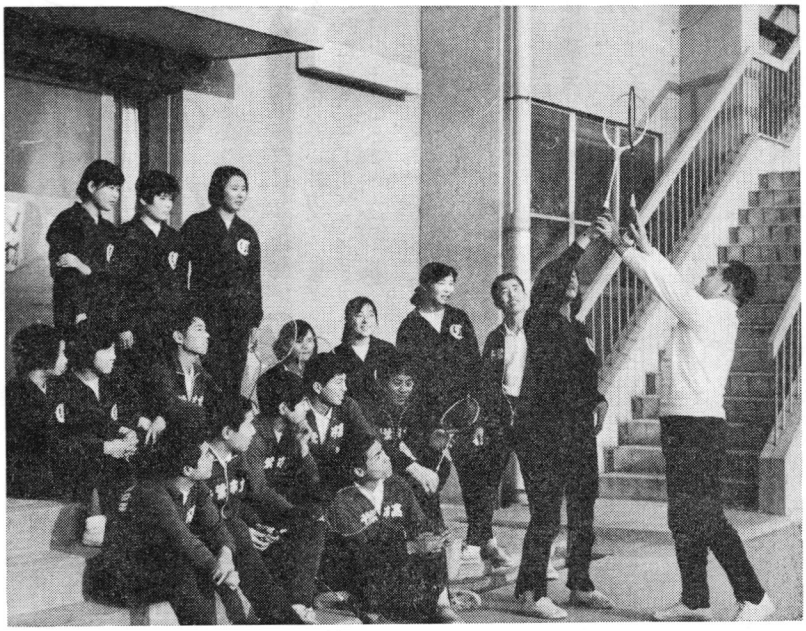
「前の任地で木更津東高をあまり強くさせちゃったんで、追いつくのにホネがおれますよ」高橋先生は、ふとったからだをゆすって笑ったが、実は、もう一歩でその木更津東をくだして県内随一になろうとしているのだ。

今年度の千葉県高校新人戦（一、二年が出場）で男子単、複ともに優勝したからだ。単は青木君、複は青木・尾形組。二人とも、まだからだはそう大きくないが、バドミントンのセンスは抜群とみた。卒業後の飛躍が楽しみな選手である。

新人戦で優勝したということは、翌年の県高校NO・1候補になったということでもある。キャプテンの菅沢君は「当面の目標はインターハイ出場」という。そして高橋監督は「温暖な千葉県に育った生徒たちは、きびしさがいまひとつ足りない。もっともっとしごく」と意気込む。

千葉市立高の名が、インターハイや団体のプログラムに登場し、そして新聞紙上をにぎわす日も、それほど遠いことではなさそうだ。

（読売新聞・小林範夫）



◀体育館前で高橋先生にコーチを受ける選手たち

≪提言シリーズ≫ 第2回

ファンの声を身近に聞け

共同通信　竹市行男

一月四日の第一回チャンピオンズ・トーナメント大会の貴重な体験から二、三の提言をしたい。〝言うは易し行うは難し〟ということは知っている。実現しろとはいわない。ただ僕は、バドミントンの発達のため——少し大げさだが——役に立てばこんな意見、要望もあるんだということを知ってもらいたいのだ。

それは㈠日本協会関係者はファンのナマの声を聞く㈡大会終了後コート、用具の提供㈢協会関係者、現役指導者、選手とファンの交流会㈣ファン・クラブ結成……などだ。

日本協会関係者がファンの声に耳を傾けるのは当たり前といえばそれまでだが、今まではあまりにもなおざりにされていたように思う。協会はこれまで「PR活動の活発化、ファン層の拡大」を目標としてきた。だがどれだけの企画を立て、努力してきたのだろうか。たとえば第一回チャンピオンズ・トーナメント大会は——観戦していたある中学生は、「完全にPR不足だよ。バドミントンを知らない人が多い。知っていても、せいぜい西洋羽根つきぐらいかな。ボクは学校の部にはいっているけど人にいうのが恥ずかしいよ」と下を向く。また、ある中年の主婦は「だれにでも出来、場所、用具も簡単。もっとうまくPRすれば子供から大人まで楽しめるのに…」とPR不足を指摘する。

協会関係者がファンの声を聞く場は多い。一例だが、同トーナメント大会終了後など最もいい機会だったと思う。大会は四時十五分ごろ無事に閉幕した。しかし残念なことに大会役員は〝すばらしい光景〟を見ずに、自分の責任は終ったとスタコラと引き上げてしまった。そのすばらしい光景とはファンが大会終了後コートで乱打を始めたことだ。それも一面しかないコートに六、七組もが…。小学生から社会人までがその場にあったラケットとシャトルを使ってである。

「ご自由にお使いください」と場内放送したわけではない。だれかが〝サクラ〟的にしかけたわけでもない。ごく自然的に「ちょうどいい機会だから一発打ってみるか」といった調子である。よほどの愛好者でなければそんなことはないだろう。その人たちも前述の——学生や主婦と同様、協会に対して期待、要求を持っていた。ファンの声は協会にとって耳の痛い批判もあろう。提案も出ることだろう。実現出来るもの、不可能なものも飛び出すだろう。だが関係者が〝やる気〟があるなら——なければ別だが——ファンの声を取り入れ、出来ないものならその理由を説明することが必要ではなかろうか。要は日本協会がファンの〝声なき声〟を積極的に聞く意志があるかどうかだ。

㈡は協会にとってさして困難な問題ではないと思う。ただ大会終了時間より少し長目に会場を確保しておくことと、シャトル、ラケットを備えておくだけ。そして試合の合間にそのむね放送すればいいのだから。二、三度は失敗することもあろう。だが定期的に行なえば出来ることだし、ファンも慣れる。

㈢は指導者、選手のつごうでうまくいくかどうか…。ただ日本協会がPRに専念するだけでなく、指導者、選手までもが一体となってはじめて円滑に、十分にその目的が達成出来るものと思う。指導者、選手にとって「めんどうなこと」は知っている。よけいな時間つぶしだろう。プロでないのだから必要以上にファンのごきげんを取ることはない——という意見もあるだろう。ただチャンピオンズ・トーナメント大会終了後、二人の女子中学生が優勝者、湯木選手に練習方法や試合中の心境を質問していた。熱心なファンは一流選手のプレーをみるだけでは満足しない。じかに話し合いの場を持ちたがり、自分たちの知らないことを聞きたがっている。湯木選手同様、その場に居合わせた小片選手も「監督の許可があり、時間的に余裕があればファンとの話し合い、クラブの練習など見学しに行きたい」という。手のつけられる座談会あたりからやってみたらどうか。そしてその輪が深く、大きくみのった時点で㈣のファン・クラブ結成へと…。

バドミントンは女子が世界一になっているものの、まだマイナー・スポーツ。だが弱小競技がちな「自分たちだけ楽しめばそれでいい」という状態では伸びがない。「バドミントンの発展のために…」という協会役員、指導者、選手が、より多くの人々に接し、その楽しさを知らせ、その交流の中から次代を荷負う優秀な人材を見つけ、育てられるような好環境と支援の受けられるような体制を作るべきだ。それには、まずPR。実のある広報活動を期待したいものだ。

命あるかぎり……

がんばる62歳の浅田さん（大阪）

バットからラケットへ大転換

浅田一雄（大阪薫英短大勤務）、明治四十年四月二十七日生、六十二才――。

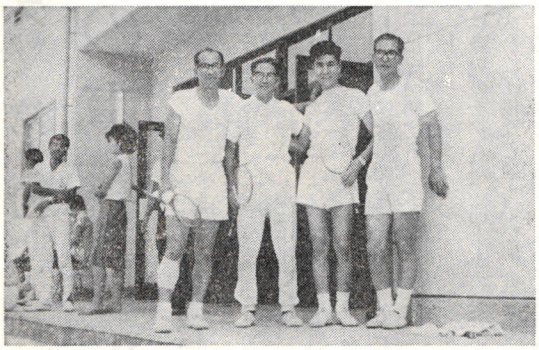
日本バドミントン協会、会員多しといえども、自らラケットを握り、コート狭しと走りまわるプレーヤーの中では浅田先生が最年長だろう。

昭和三十三年、大阪市立高校において野球部監督として部を優勝に導き、以後バドミントンに転向、同部監督として、またバドミントン一年生としての歩みを始める。

入門書を左手に「なにくそ！」という執念を右手に、寝食を忘れて没頭。バドミントンの苦労もこのころのことがいちばん印象に残っているとのこと。

本を読んでも意味の解せない用語が出てくる、その度にあちこちとたずねまわって究明していく。練習時間がなかなかとれない。やりたいことはいっぱいあるのだが、コートの使用が意のままにならない。

そこで対外的には教職員連盟に加盟、全日本教職員大会にも第三回から参加、宿舎では若い先生に処世訓を、体育館では一流選手のプレーを見つめるとともに、自身も今井先、伊藤基記等の諸先生に勝るとも劣らないファイトぶりを披露、一方、学校では、始業前一時間の早朝練習を開始、春夏秋冬、京都の自宅から体育館へ、先生の姿の見えぬ日は一日とてなかった、とはかっての部員の話。



▲左から二人目が浅田さん

時計も驚く早朝練習

この早朝練習、卒業生たちにとって、就職後も会社に遅刻する心配なし、と思わぬところで喜ばれているとか。

練習にあたってはチームワークの重要性を力説、技の指導もさることながら、精神面において、父親にも似た徹底ぶり。不幸にして病を得られ、手術を余儀なくされたご主人を前に、輸血を申し出る部員が続出したのも先生ならではの師弟の結びつきのたまもの。

部の指導以来、六年にして大阪市立高校大会に優勝を成し遂げたことを頂点に、楽しい話は語り切れないほどでてくる。

いわく、この間の市民大会では何回戦まで勝ち進んだよ。ダブルスならまだまだ若いものには負けんよ…

いわく、この間の練習のときは、気がついたら二時間もコートにはいりっぱなしだってね……。

胃下垂も治る

いわく、バドミントンを始めてから胃下垂が完全に治ってしまったので医者がおどろいてね。だから会う人ごとにバドミントンをすすめている……。

六十を過ぎて、なお、若人に負けぬ身体と精神。

持って生まれた素質もおありだろうが、それ以上に、バドミントンによって得たものが大きいと強調される。

今後もご自身の健康法の一つとして、いや、それだけでなく、なにごとにも粘りの精神をもって徹底してやり抜くんだという、人生の目的の一つとして、生きているかぎり、バドミントンを続けると断言されておられる。

底辺の拡大、という意味だけでなく、世の人々の、バドミントンというスポーツに対する正しい認識を、啓蒙する意味からも、我々若輩の先頭にたたれて、いつまでもいつまでも壮健であってもらいたいと念願している。

第九回全日本教職員バドミントン選手権大会においても、必ずやその雄姿が見られるであろうことは、まちがいがない。（宝来敏夫＝大阪）

北から南から N S

北から南から N S

元ユ杯の女王・横井（現東条夫人）さん

見事なカムバック！

＝香川県総合選手権＝

§§§ 夫君とペア，混合複に栄冠 §§§

かっての〝世界の女王〟東条（旧姓・横井）文子さんが、香川県総合選手権大会に元気な姿を見せ、あざやかなラケットさばきを披露、混合ダブルスに夫君と組んで優勝した。

横井さんは三十八年の全日本総合で女子シングルス、四十年に現在の夫君と組んだ混合ダブルスに優勝、四十一年には、日本が初参加したユーバー杯世界選手権のメンバーとして、チャンピオンの座を獲得するなど、輝かしいキャリアの持主。

結婚のため、香川県勢を総合優勝に導いた四十二年の埼玉国体を最後として、第一線から退いていた。

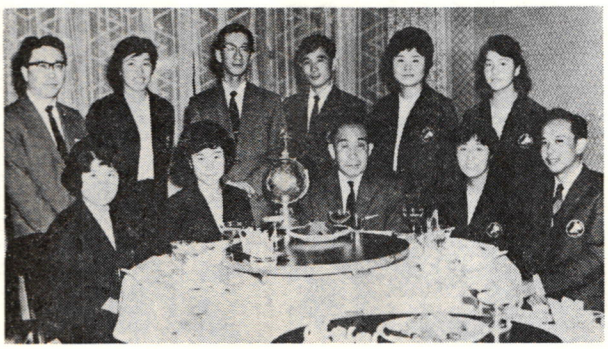
夫君の東条義昭氏は琴平電鉄の監督をつとめており、練習不足のきみがあったとはいえ、そこは〝むかしとったキネズカ〟とやら、絶妙なコンビぶりで、現役選手を総ナメにした。

今回の出場は一粒ダネの長女・美希ちゃんがようやく生後十カ月となり、文子選手もからだの自由がきくようになったからだ、という。

また、これからも楽しみながらラケットを握りたいとのこと。ゲームのあと同選手は

「練習をやっていないため、足がついていかなかった。でも、久しぶりにプレーをして、すごくいい気持ち」といい、

いくぶん低迷気味の県下バドミントンについて「全国レベルと比べてみて、技術では、そう劣っていないと思う。ただ、もう一歩の練習と勝負への執念がほしいみたい」と、ちょっぴり辛い採点をつけていた。



▼前列左端が東条（横井）さん41年ユ杯のメンバーと

吉川（男子）小片（女子）が二連勝

香川県総合選手権大会は、一月十一日、県立体育館で個人戦全種目の決勝までを行なった。

シングルスの男子は、吉川（中商事）、女子は小片（日体大）が、ともに二連勝を飾った。

ダブルス男子は吉川（中商事）と高尾（高松商）組が初優勝し、吉川は〝二冠〟を得た。女子は山本真、細川（琴平電鉄）組が二年連続、四回目の栄冠を手にした。

▼男子シングルス決勝

吉川（中商事） 2（15―11）0 与田（高松商）

○…吉川は二連勝

▼男子ダブルス決勝

吉川（中商事）・高尾（高松商） 2（15―4、15―6）0 英・小田（高松一高）

○…吉川組は初優勝

▼女子シングルス決勝

小片（日体大） 2（11―3、11―2）0 山本真（琴電）

○…小片は二連勝

▼女子ダブルス決勝

山本真・細川（琴電） 2（15―2、15―11）0 綾井・山本み（第百十四銀行）

○…山本組は二連勝四回目の優勝

▼混合ダブルス決勝

東条義（琴電）・東条文（木旺会） 2（15―10、15―5）0 小片（日体大）・喜岡（善通寺一高教）

○…東条組は初優勝

（以上、この欄は一月十二日付けの四国新聞から。資料提供は香川県協会の野口利行事務局長です）

スポーツと心理学……〈下〉

天才とは努力を苦にせぬ人

〝根性〟の一考察

「天才は1パーセントの霊感と99パーセントの汗とから成る」発明王エジソンは、こういった。

私は、もっと簡単に、これを「天才とは努力を惜しまず、苦にしない人のこと」と考える。そこで、今回のテーマ〝根性〟ということばを〝天才〟と置きかえてみたら、どうだろうか、と思うのだ。

近代五種―馬術、フェンシング、水泳、射撃、クロスカントリーから成る五輪種目―に内野重昭という選手がいた。ローマ五輪の前年、日本の第1号選手として、この道にはいった。

ときに28歳。泳ぐのがニガ手だった。近代五種の水泳は自由形三百㍍で、これを4分で泳ぐと千点（当時のルール）だったが、内野は最初4分20秒もかかった。

そこで合宿（といっても、毎日五種目の訓練をやるのだから大変）があると、同僚が寝しずまってから夜中にプールへ行って練習した。そして一年後には30秒も縮め、3分50秒台にまでなった。水泳では「二十歳すぎたら伸びない」のが常識だから関係者はおどろいた。

内野は36歳、メキシコ五輪の予選まで選手をつとめ、四度も日本チャンピオンとなった。

東京五輪の前〝根性とはなにか〟が話題となり、その本質と養成法をめぐって、コーチの会議さえ、何度も開かれた。

だが、根性養成法といっても、簡単ではない。スポーツ心理学では、根性を「一つの目的達成のため、集中的、継続的に働く意志とその行動の過程」というように解釈している。

もう少し具体的にいうと、自分の性格、環境、体力、技術などのプラス、マイナスを分析し、目的達成のため、どんな方法が合理的、能率的か、対策を立て、勇気と決断をもって、即刻、実行すること――だが、問題は、そういうことを考える能力に乏しい人、考えても行動力に欠ける人を、どうやって引き上げるかである。ここに指導者の悩みが出てくる。

人には天才型と努力型がある、という。この分類でいくと、元卓球の世界チャンピオン荻村伊智朗氏は前者のタイプだった。彼は中共が日本を王座から追い落したころ（現役引退）「中共のショート（短くピッチの早いストロークで、前陣速攻）は日本のロング（バックスイングが大きい、長いストローク）より0・35秒早い。このタイミングの差が勝敗につながる」と研究した。

天才は同時に努力家、勉強家なのである。スピード・スケートの五百㍍世界№1鈴木恵一選手もそうだ。彼は「最良のコーチは自分自身だ」と、体力トレーニングもテクニックも、ほとんど独力で研究した。自分が滑るフィルムを、リンクの何カ所かから撮影してもらい、外国選手をとったものと二本並べてスクリーンに写し「どこが、なぜ、どうちがうか」勉強して対策を練った。

記録やレベル向上、勝利への意欲をわき立たせるには、まずスポーツが楽しく、苦しみや恐怖も、方法によっては、意外にスンナリ乗り越えられることを、理解させなければならない。

順天堂大・太田哲男助教授によると、それと逆のこんな例がある。ある水泳千五百㍍自由形選手は、長距離を乗り切る苦しみを克服するため最も苦しい八百のターンのとき「もう一度、八百を泳ぐのだ」といいきかせた。ところが、八百以後のラップは前半にくらべ、ずっと遅くなった。この選手は実際には苦しみを克服したのではなく逃げたのだった。

もし、彼が「自分が苦しいときは、人も苦しく、だから、一本でも余計泳いだ方が強くなる」と思うことのできる人だったら、大選手になったろう。

レベルが上り、自分がチームや社会にとって価値ある人間である、と認識できるようになると、名誉欲や自尊心が生れ〝トップ〟への意欲はさらに強くなる。そして最後にはスポーツが自分の生きがいとなり、一種の使命感を持つまでにいたる。

この代表的な例が東京五輪女子バレーの、ニチボー〝東洋の魔女〟だった。大松監督に「おれについてこい」といわれ、どんなシゴキにも耐えたのは、彼女たちに「日本のため金メダルをとるのが自分たちの義務」という使命感があったからだ。スポーツの目的と〝お国のため〟を結びつける発想の是非は、この際、論議の対象外である。

日刊スポーツ盛川記者によると、重量あげの金メダリスト三宅兄は、こういっている。「おれはいつもデカイことといっているから、それを実行しないと、笑いものになるからね。だから苦しくたって、やるんだよ」。

（東京新聞・後藤忠弘）

私のラケット



《選手とのミニ・インタビュー》

スチールは〝チャンピオンズ〟で初

太田節子さん（トヨタ自工）スチールのラケットですが、いえ、この大会（チャンピオンズ・トーナメント）で初めて使ったんです。重さ？どのくらいかしら、むかしのウッドのフレーム、さあ、それもどのくらいだったかな、スチールの使いごこち、まだ、なれてないから…なれるといいって、みんないってますけど。

★　★　★

柴山きよ子さん（東大阪高）スチールを初めて手にしたのは昨年のインターハイ予選のとき。軽いから振りも早くなるし、飛びも早くて、なかなかいいんだけど、自分の調子が悪いときはタイミングがうまくとれず、打点が低くなったりして…。いま使っている木のフレームのは重さ122㌘です。

★　★　★

小片千恵子さん（日体大）昨夏、マニラの国際学生に行ったとき、竹中さんに教えられて初めてスチールを振ってみたんです。香港で買うと無税で安いからって、3本も仕入れてきました。利点？そうね、軽くて振りやすいこと、とくにダブルスのときには便利ですよ。

★　★　★

竹中悦子さん（新潟青陵短大）そうね、小片さんと同じ。スチールは振りにムダがなくて、いいと思う。とくにダブルスにはネ。軽い（105㌘）のはスマッシュに便利だけど、半面パンチがどうか。振りの鋭さと自分のパンチのバランスが問題ですね。高校時代は130ぐらいの重い木を使ってました。

★　★　★

終始ウッドを愛用

高崎弘子さん（東大阪高）スチールは一度も使ったことありません。いまのラケットですか120㌘です。いえ、以前は124～125ぐらいだから、もっと重かったんです。パンチのあるストロークには重い方がいいと思うんですけど、私あまり力がないから、少し軽くしたんです。

意外に軽い湯木のラケット

湯木博江さん（日女体大）高校のころはもちろんウッド、重かったですよ、129～130ぐらいだったなあ。スチールに切りかえたのは二年生から。なぜ？ためしに使ってみたら、とてもよかったんで…。とくにダブルスにいい。以前はだから単複でラケット変えたこともありますよ。え、みんな、同じようなことといってるの？いまの重さは110。いやだ、竹中さんは105だって？私と同じものだから、じゃあ105かな。

専用ファイルを

バドミントン界専用のファイルを作って発売してもらえないでしょうか。

雑誌の性格上、とっておかなくてもよいのかもしれませんが記念にとっておくという人も多分多いと思います。

そこで、一年分をそっくり入れられるファイルを作ってもらいたいのです。そうすれば、この薄い本もやぶけることもなくいつまでも読めるというものです。期待してます。

（田無・一ファンより）

係りから　お説ごもっともです。ご期待にそえるよう、研究いたします。発売されたら、イの一番に買って下さいね。

なお、本誌は、たしかに薄い本ですが、これを厚くするにはみなさんからの積極的なお便りや投稿が一番です。どしどし、お寄せ下さい。

保存のため、ということも考え「技術講座」と「写真グラフ」は、いつもそっくり取りはずせるように編集してありますので微意をお汲みとり下さい。

読者から

★　★　★

選手の住所を教えて

★　★　★

バドミントン界の内容ですがもっと一号のときのような、なにかを大きく特集したようなものにしてほしいと思います。

○○特集とか書いてあってもただ、だらだらと書いてあるだけで、写真も少いと思います。

それから一度でよいから日本の主力選手の住所、年令、つとめ先き等をのせて下さい。それからクイズをのせて下さい。

（東京・八王子＝真宮あつ子）

係りから　第一点についてはなるべく、そのように努力します。第二、第三のご要望は、近いうちに実現するよう検討します。関連して、選手に対する質問やお便りも歓迎します。

★　★　★

昨年は、バドミントン協会にとりまして、最良の年であったように思われます。女子が女王の座を守ってくれた上、待望の「バドミントン界」が出たことでさらに喜びが重なり、さっそく一年分の予約をさせていただきました。今後の発展を祈ります。

（岩手・一関市＝阿部邦典）

質問箱

この欄への質問、お便りを歓迎します。

なお、この欄のお答えの担当者は、とくに断わり書きがない場合は、日本バドミントン協会伊藤基記指導委員長です。

ズブの素人へのコーチ法

私は九年間もバドミントンをやっています。仕事上、あまり時間がないのですが、近所の人たちにもすすめたいのです。全然、興味を持ったことのない人など（お百姓さんなども）に、どのようなコーチをしたらよいでしょうか。（和歌山・岩西壮行）

お答え　岩西さんのような方が一人でも多くなれば、日本のバドミントンはきっと素晴らしい発展をとげるに違いおりません。というのは、自分でバドミントンを楽しむだけでなく、この素晴らしいバドミントンというスポーツを、自分の周囲の人々に是非伝えたいという気持がおこること自体、その人が本当に真底からバドミントンの愛好者であることを証明しているからです。

ところで、今ラケットを握たばかりの初心者をやみつきにさせるのはなかなかのこむ仕事にもなりますし、いわんや一向に関心を持たない人々を〝バドミントン病中毒患者〟にまでもっていくには容易なことではありません。

がしかしバドミントンそのものは比較的とりつき易く、その面白さは抜群ですから、そこに情熱に裏付けされた工夫があれば、案ずるより生むが易しという面もあります。

農業を業とされる方々にとって、バドミントンは特に適したスポーツだということができます。その理由は、次の通りです。

農業だけでなく、一般の社会人の日常の生活動作の中から、減少しつづけている運動がいくつかあります。その重なものを挙げますと、

一、跳ぶ、急いで歩く、走る。
一、投げる、打つ。（体をむちのように使う）
一、体を反らす。
一、注意を空間を移動するものに集注する。
一、けんすいする（腕に体重をかける）
一、リズムにあわせて、あるいはリズミカルに体を動かす。
……等々を数えることができます。

これらの運動群は人間の体に適当な物理的刺激を与えることによって、現代人の健康維持、増進に貢献する度合いは非常に大きいものと評価しなければなりません。

バドミントンの中に、これらの運動群が、いかに合理的に、豊富に含まれているか、充分おわかりいただけると思います。

朝夕の風の静かな時を選んで庭先きや広場、できれば講堂や体育館の中で、ハネの打ち合いをして下さい。その打ち合いだけで充分運動量をかせぐことができます。それで満足しなくなったら、ネットを加え、ラインをひいて、簡易ゲームにはいり、それを平行して、基本的なストロークの練習を始めて下さい。

岩西さんは九年間もご自分でつづけておいでになりますので技術的には相当のところにお進みのことと拝察します。

県内のバドミントン協会の方特に指導関係と密接な連絡をとられまして、入門の方々に、適当な用具や方法をアドバイスし、なるべく会場や相手を斡旋して下さい。

なお、これからも、この紙上に、こういう入門書的な記事がどんどん掲載されると思いますので、ご愛読をお願いしておきます。

基礎練習法の解説にも力を入れて

底辺拡大の意味から、基礎的な練習方法なども、お願いします。（山形県立天童商工高バドミントン部顧問・遠藤宏一）

お答え　御提案至極もっともなことに思います。種をまき、苗を育てる沃野なくして、立派な収獲が期待できないことは理の当然であって、日バの指導委員会においても過去数年、この底辺の拡大、充実をめざして、少年少女の社会的なクラブ活動の斡旋、小中学校の体育の授業、放課後のクラブ活動の中にくいこむ方策について、種々、提案を行なってきました。

それにつづくものとして、高校生のレベル・アップは大きい課題として、とりあげてきました。高校生なりの基本的なトレーニング、基本的なストロークについても、垣例の全国指導者研究会、全国高校選抜合宿等の内容においても、この点を勘案してきたつもりであり、新発刊の日バの月刊誌〝バドミントン界〟の中にも、特にこの項を設けて連載をつづけております。

しかし、紙面の都合もあり、必ずしも広汎なご要望に充分応えるところまでいっておりません。これから漸次、ご要望に沿うような記事が載るようになると思いますので、引きつづいてご愛読いただきたいと念願して筆をおきます。

係りから　近い機会に初心者むけの講座を考えたいと思っております。

初心者のための本を紹介して下さい

初心者ですが、目下、バドミントンに熱中していますので、なにか、為になるような本がありましたら、ご紹介ねがいたいのですが。（香川・三菱金属鉱業＝安藤栄子）

係りから　バドミントンに関する書籍類は、あまり多くありません。それは、かって出版された名著のいくつかが、現在、絶版とか品切れなどになっているからです。

そこで、初心者むけの本となりますと、かなり種類が限定されてきますが、とりあえず、比較的、手に入りやすいものを次にあげておきましょう。

①川端昇市「バドミントン競技」（東京都新宿区横寺町・旺文社、百七十円）バドミントンに関する主要な問題は、ほとんど盛られており、かつ、やさしく書かれています。

②伊藤基記「バドミントン上達法」（東京都文京区大塚3の8の1・不味堂、六百円）入門から上級まで、かなり、うんちくに富んだ本です。心理学的、生理学的な面に、わかりやすくメスを入れてあります。

目で見ておぼえ、理解を早くすることを主眼にしたものとしては

③三須徳次「最新バドミントン教室」（東京都千代田区神田三崎町2の15の11・林書店、六百八十円）

④兵藤昌彦「図解バドミントン」（前出、不味堂、二百円）

⑤相馬武美「図解コーチ、バドミントン・ゲーム」（東京都文京区関口町1の34の9・成美堂、二百円）

などが、おすすめできます。

いずれも、お近くの書店を通じて、注文できると思います。

このほか、外国ものの飜訳で定評があるものは

「ビギニング・バドミントン」（米国フリードリッヒ、ラトレッジ共著、今井先訳。東京都千代田区神田錦町3の3、ベースボールマガジン社、百八十円）

「ウイニング・バドミントン」（米国ダビドソン、グスタフソン共著、兵藤昌彦訳。前出、不味堂、六百円）

などです。

地元のサークルを教えて

神奈川県下で、夜もしくは土曜の午後か日曜日に、同好会のようなサークルがありましたらご紹介下さい。

YMCAなどのサークルはどのようなものでしょうか。（神奈川県平塚市大縄電々宿舎内・後藤均）

係りから　まず、あなたの住んでいる地元ですが、こちらではくわしくわかりませんので、平塚市バドミントン協会（塚市31の3226番、大木一郎氏＝平塚商高勤務）へお尋ね下さい。

つぎに横浜では横浜YMCAが毎週火、金曜の両日、午後七時三十分から練習会をやっています。場所は根岸線関内駅下車、またはバスと市電の市庁舎前下車。費用は入会金五百円、そのほか三カ月分前納二千円です。

このほか横浜市三ツ沢のグラウンド入り口下車（横浜駅からバス8番→11番停留所）の県立スポーツ会館では、毎週木曜日の午後六時から、やはり練習をやっています。

おことわり　この種の質問が多いのですが、各地のサークル、クラブ、練習会などは、その地方の教育委員会内の体育課もしくは係り（県庁、市町村の役所か役場内）と、各県バドミントン協会（そこからさらに、お住いの地区協会を調べる）事務局に聞くのが早道。近くに各県協会所在地を掲載します。

指導者講習会をもっと多く

中学校での指導を行なっているものですが、最新の技術、トレーニングなどについて、指導者講習会をたびたび開いて、研修させてほしいと思います。（大阪花乃井中教・渡辺真規子）

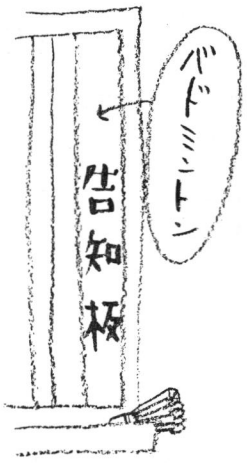
お答え　渡辺先生の御熱心なご指導振りは風の便りに拝聞しております。渡辺先生のような中学の指導者がおられる学校の生徒、その地域をうらやましいと思います。

中学の体育の撰択教材にとりあげられることが（四十七年度から）明確になった今日、ご要望にあるような指導者講習会がもたれて、現に指導されている先生方の御意見を交換することが大変望ましいのですが、日本バドミントン協会として、予算の裏付けをもって行なわれているものとしては、垣例の全国指導者研修会があります。例年十一月の中下旬に行なわれておりますが、本年度からはなるべく早く、でき得れば四月中にも開催したい所存でおります。

決定しだい各県の指導委関係に要項を発送致しますので、県協会の方から、いずれご連絡があると思います。この日バ主催のもの以外にも、各県、各地区の主催でこのような催しが沢山行なわれるようにありたいものと念願しております。

係りから　全国で中、高校生を指導しておられる先生方から「私の指導法」というようなテーマで、本誌あてに投稿をいただけると、非常にプラスかと存じます。

また、本誌としては、今後さらに、指導および技術向上の面の記事に力を入れていくつもりでおりますので、記事のアイデア、注文などを、ご遠慮なく、お寄せ下さい。



全日本総合は11月18日から

本年度日程など決まる

《一月全国総会》

昭和四十五年度全国理事会、同総会は一月十八日から東京・神田の如水会館で開かれ、新年度の全国競技日程、予算などを審議した。

おもな決定事項つぎの通り

◆競技日程 ▼社会人大会（5月3日―5日、千葉市）▼実業団大会（46年2月、和歌山・湯浅町＝安保改訂問題、町長選などの関係で、本年7月の予定を変更した）▼高校大会（7月27日―8月2日、名古屋市）▼教職員大会（8月4日―7日、岐阜市）▼学生大会（11月上旬、大阪市）▼国体（10月10日―14日、岩手・釜石市）▼全日本総合大会（11月18日―23日、東京）

全日本総合に高校生は単複位8まで

◆臨時総会の変更 これまで国体のさい、開催地で臨時総会を行なってきたが、多忙の上、費用が地元にかかるなどの問題が多いため、本年度から廃止、代わって七月に東京で開くことになった。

◆全日本総合選手権大会について 参加資格を一部改正し①ブロック推薦をやめる②高校生は全国ランキング単複とも八位までを出場させる――ことに決まった。

ウェアなどの公認、推奨制発足

◆用具の公認、推奨制について 競技の健全な普及、発展をはかるため、ラケット、ウェアー、シューズなど用具を、推奨する制度を検討中だったが、メーカー側との了解点に達したので、スタートさせる（具体的には、次号の本誌「バドミントン界」に掲載）

◆教職員大会の競技種目改訂について 三年前から日本教職員連盟主催で行なってきた成壮年団体戦（30代単、30代複、40代複の三対抗）を、日本協会主催種目として、教職員大会の公式種目に入れる。

★　★　★

係りから――住所、地番の変更、役員、選手の消息、人事などがありましたら、どしどしお寄せ下さい。

【住所変更】◆青森県協会＝弘前市下白銀町2、東奥義塾内。事務担当者・市川和司（〒030）

◆福井県協会＝福井市大手3の10の1、福井市役所内（〒910）

6、電＝弘前2局1311）

新・広報委員長に牧野氏　小飼氏は辞任

日本協会広報委員長、小飼栄一氏（常務理事）は競技力向上委員就任など、用務多忙のため、委員長職を辞任した。

後任委員長は、これまで同委員をつとめていた牧野武氏（四〇）＝日本協会理事、朝日新聞東京本社文書部＝前委員長同様、よろしくお願いします。

競技力向上委メンバー決定

新設の競技力向上委員会のメンバーが、つぎのように決まった。

▼委員長＝川端昇市（日本協会理事長）

▼委員＝小飼栄一（常務理事）佐藤芳朗（同）板垣隆房（指導委員）永井栄一（立大OB、ベニヤ商会）越川啓（慶大OB、伊藤忠商事）杉田博（横浜立野高教）小宮好雄（トヨタ自工）渡部紘一（宮城県協会指導委員長）佐藤茂雄（東大阪高教、指導委員）遠井稔男（真岡高教、指導委員）高木紀子（東海女短大教）天野博江（同）＝以上十四人

◆昭和45年度シャトル検定、審査合格証について 従来シャトル検定、審査合格証はシャトル1個に1枚ずつ張りつけていましたが、業務能率向上のため昭和45年度から

①1打ケースはフタの両端に証紙を張って封印する。②半打ケースは片方のフタだけに張って封印する。

という方式に改めました。これについては、すでに各都道府県協会あて、日本協会より連絡しましたが、一般愛好者、プレーヤーの方々も、ご了承下さるよう、お願いします。

なお、検定合格証は、水鳥シャトルは金地に紫の文字、陸鳥シャトルは銀地に紫の文字。審査合格証（プラスチック・シャトルなど）は、金地に紫文字で「審査合格証」となっています。

ネット検定合格証は、これまで通り変わらず、シシュウ糸は紫です。

◆会員証発行について 日本バドミントン協会の登録会員証については、本年一月の全国総会の決定にもとずき、今年度から、日本協会から都道府県協会へ、一定枚数をあらかじめ発行、都道府県協会が、必要事務手続きを行なった上、来年三月末日付けで清算する形をとることになりました。

会員各位とも、ご承知おき下さい。

全英など海外遠征に出発

小島、高木ら男女七選手

恒例の海外遠征メンバー男子二、女子五人が次のように決定し、三月五日午後九時二十分、羽田発のドイツ航空機で出発した。

一行は全デンマーク、全英、全米（男子はこのあと全カナダ）の各選手権に出場し、女子は四月六日、男子は四月十八日に帰国する。

女子は次期ユ杯の王座防衛のための足がかり、男子にもト杯の苦杯を吹きとばし、さらに前進を約束するような、立派な活躍を期待しよう。

なお、湯木博江選手には、全英、全デンマークのシングルスタイトル防衛もかかっている。

遠征詳報とその収獲については、近くの号で特集の予定。

【派遣選手】▼男子＝小島一平（ヨネヤマ・ラケット）本間順次（中大）▼女子＝天野博江（東海女短大教）高木紀子（同）湯木博江（日女体大）相沢マチ子（新潟青陵短大）竹中悦子（同）

【日程】▼全デンマーク（3月9日―12日コペンハーゲン）▼全英（3月18日―21日ウエンブレー）▼全米（4月1日―4日ボストン）▼全カナダ（男子のみ参加＝4月10日―12日ウィニペグ）▼帰国＝女子4月7日、男子4月18日の予定

昭和45年度検定合格シャトル名一覧（公示）

会社名	種別	銘柄
株式会社　三和	水鳥	ハイレッド
〃	〃	グリーン（ホロ羽）
有限会社　ジャワ商会	〃	ファスト　ゴールド
〃	〃	ファスト　シルバー
株式会社　トヨダスポーツ	〃	トーナメント　ブルー
〃	〃	トーナメント　ブラック
西村製作所	〃	ニンマ印　バードトップ
羽立工業株式会社	〃	ハタチ　ビクトリー
日本バドミントン	〃	N.B.I.C.M　シルバー　ブルー
インダストリー株式会社	〃	N.B.I.C.M　ホワイト　ウイン
株式会社　諾江製作所	〃	サンバタ　クイーン
〃	〃	サンバタ　キング
〃	〃	水鳥　サンバタ
株式会社　ヨネヤマラケット	〃	トーナメント
〃	〃	トーナメント　デラックス
羽立工業株式会社	陸鳥	ハタチ　トーナメント
株式会社　諾江製作所	〃	サンバタ　スター
〃	〃	サンバタ
株式会社　ヨネヤマラケット	〃	トレーニング検定合格球
〃	〃	トレニーング　コック
羽立工業株式会社	合成（水）	ハタチ　チエンジャー
〃	合成（陸）	ハタチ　ハイコック
日本カアルトン株式会社	〃	カアルトンナイロンシャトル
〃	〃	インターナショナルトーナメントモデル
	〃	カアルトンナイロンシャトル
		カレッヂ

昭和45年度検定合格ネット名一覧（公示）

会社名	品名
鐘屋産業株式会社	ナイロン　A級
〃	綿　B級
株式会社　ジィティヤング	20番手12本クレモナビニロンテトロン引紐
〃	20番手12本綿　テトロン引紐
〃	20番手12本綿　クレモナロープ引紐
株式会社　寺西喜商店	バドミントンネット　C検定
松本製鋼株式会社	20／12　倉敷ビニロン（MATUMOTO）
ミセキネット製作所	ミセキ　VA
〃	ミセキ　A

早わかり競技規則
ルール100問？

連載⑤

2. シャトルとネット
（規則第4条）

問27 シャトルって普通はシャトルコックというんじゃありませんか。

答 一般にはシャトルコックといいますね。競技規則書には「シャトル」と書いてあります。羽の部分がシャトルで台の部分がコックだという人がありますが、そんな意味ではありません。バドミントンの正式競技について話す場合は、規則書通り「シャトル」といいましょう。一番いけないのは「コック」と呼ぶことです。これは絶対に避けて下さい。日本の或る製造業者がプラスティック製のシャトルを「プラコック」と名付けました。いかにも日本人らしい思いつきですね。このように「プラコック」と一語にしてしまって新らしい製品の固有の名称と考えはそれはそれで結構ですが、プラスティックやナイロン製のシャトルですという説明的な呼び方の場合はプラスティック・コックとかナイロン・コックといっては工合が悪いのです。プラスティック・シャトルとかナイロン・シャトルというようにしましょう。

問28 「バード」と書いた本を読んだことがあるんですが。

答 「バード」はシャトルの愛称ともいうべき呼び名です。真っ白な羽が軽やかに飛ぶ有様から「小鳥」（BIRD）とは、美しくも表現したものですね。また、「バーディ」（BIRDIE）などと呼ぶこともあります。大変可愛らしい呼び方じゃないですか。

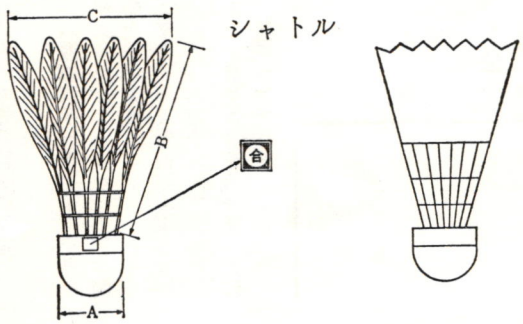
問29 シャトルには、競技規則と見ると、大分色々な規定がありますね。

答 そうですね。材質、形と寸法、重さが規定され、そして速調（ペース）がきめられています。速調は4つの条件で打ったとき、12・64㌘から13・1㌘の飛距離が得られれば正しいとされます。その四つの条件を並べて見ましょうか。

①普通の力のプレーヤーが、②上に向かって、③フル・スイングの、④下手打（したてうち）で打ったときとなっています。そして、速調は、バック・バウンダリー・ラインの上で、サイド・ラインに平行に打って、向い側のバック・バウンダリー・ラインの手前0・3㌘以上～0・76㌘以内に落ちるのが正しいとしてありますから、計算をして見ますと、前にいいましたように、12・64㌘から13・1㌘の間ということになります。ここで、バック・バウンダリー・ラインの上で打つというのは、打者がラインの上にいることでなく、シャトルがラインの真上でラケットに打たれる意味です。この点は英語の原文を見ないとよくわかりません。条文の翻訳では、訳された日本文も条文の形でなければなりませんので、なかなか意を尽しません。原文はIBFのハンドブック（毎年1回発行）に出ています。600円くらいですから、日本バドミントン協会へ申込んで買い求め辞書を引きながらしらべるのは英語の勉強にもなりますね。

問30 前に「競技規則の成り立ち」のお話のとき、第4条は国によって違う場合があるということでしたが。

答 それは、シャトルの規格のうち、材質と寸法だけは違っていても、他の点が合っていて、その国の競技規則で認めれば、正式に使用してよいという点です。例えば、プラスティックやナイロン製でも、全体の形、重量、速調が規格に合っていれば認めてよいのです。日本でも昭和44年度から合成シャトルを検定会での審査の対象とすることになりました。これは国によって色々ですから、国際試合のときは、対抗する両方の国が同意しなければ、この種のものは使用できないということが書き添えてあります。



寸法		
	A	2.5～2.8㎝
	B	6.4～7.0㎝
	C	5.4～6.4㎝

重さ	4.73～5.50g
羽	14～16枚
飛距離	12.64～13.1m

（合成シャトル）

重さ	4.73～5.50g
羽	スカート状
飛距離	12.64～13.1m

【お知らせ】

「ルール百問」の原本、一部百八十円（送料別）でお分けします。

★申し込み＝東京都練馬区旭ケ丘一ノ五一（〒176）日本教職員バドミントン連盟・前田耕作あて

★代金払い込み＝三菱銀行江古田支店、日本教職員バドミントン連盟・前田耕作

▨44年度東京都高校新人戦大会（1月11～18日、豊島・目黒体育館）

◆男子団体

▼一回戦

日大桜丘 4―1 城北高
都国立高 5―0 昭和一高
都九段高 5―0 錦城高都
都中野工 5―0 都三鷹高
都両国高 3―2 都戸山高
都三商高 5―0 都文京高
都一商高 3―2 都八潮高
都四商高 4―1 都板橋高
早稲田高 5―0 芝　高
都小石川 5―0 都荒川商
高　輪 高 3―2 桐　朋
都武蔵高 3―2 国学院附

▼二回戦

聖学院高 5―0 日大桜丘
都九段高 4―1 都国立高
都中野工 3―2 都両国高
都三商高 不戦勝
堀越高 4―1 都一商高
早稲田高 3―1 都四商高
都小石川 3―2 高輪高
日大鶴丘 5―0 都武蔵高

▼三回戦

聖学院高 3―0 都九段高
都中野工 3―0 都三商高
堀越高 3―0 早稲田高
日大鶴丘 3―1 都小石川

▼準決勝

聖学院高 3―0 都中野工
日大鶴丘 3―1 堀越高

▼決　勝

日大鶴丘 3―1 聖学院高

◆女子団体

▼一回戦

都中野工 4―1 都文京高
都武蔵高 4―1 都志村高
日体桜華 5―0 都板橋高
日本橋高 4―1 日大桜丘
東女学院 3―2 佼成女高
成蹊高 4―1 国学院附

▼二回戦

桐朋女高 5―0 都中野工
慶応女高 5―0 村田女商
都南葛飾 3―2 都荒川商
トキワ松 5―0 都同島商
女子聖学 3―0 都武蔵高
東成徳高 5―0 都戸山高
千代田高 5―0 都国立高
十文字高 3―0 日体桜華
巣鴨女商 3―0 日本橋高
都小石川 5―0 都八潮高
都三鷹高 3―2 東京女学
都一商高 4―1 東京立正
都三商高 3―0 東女学院
蒲田女高 4―0 宝仙高
都四商高 3―2 都池袋商
二階堂高 5―0 国学院附

▼三回戦

桐朋女高 3―0 慶応女高
トキワ松 3―0 都南葛飾
女子聖学 3―1 東成徳高
十文字高 3―1 千代田高
巣鴨女商 3―2 都小石川
都三鷹高 3―1 都一商高
都三商高 3―0 蒲田女高
二階堂高 3―0 都四商高

▼準々決勝

桐朋女高 3―2 トキワ松
十文字高 3―1 女子聖学
巣鴨女商 3―0 都三鷹高
都三商高 3―1 二階堂高

▼準決勝

桐朋女高 3―2 十文字高
都三商高 3―1 巣鴨女商

▼決　勝

桐朋女高 3―1 都三商高

▨第16回近畿高校選手権大会（44年12月20、21日・大阪中央体育館）六県から男子56校、女子56校が参加

◆男子シングルス

▼準々決勝

永沢 2（15 6 15―9 15 6）1 巽
吉村 2（15 15―10 11）0 樋木
竹内 2（15 15―10 3）0 永沢
永沢 2（15 8 15―4 8 15）1 吉村
金田 2（15 15―5 5）0 酒井
竹内 2（15 15―1 3）0 西村
吉村 2（15 15―10 11）0 樋木
竹内 2（15 3 15―13 15 2）1 金田

▼準決勝

永沢 2（15 15 6―9 15 6）1 巽
竹内 2（15 15―10 3）0 永沢
吉村 2（15 15―10 11）0 樋木
竹内 2（15 3 15―13 15 2）1 金田

▼決　勝

竹内 2（15 15―10 3）0 永沢

◆男子ダブルス

▼準々決勝

山永 沢本 2（15 15―7 7）1 竹内 吉村
樋西 木村 2（15 15―3 7）0 壁山 館本
金石 田川 2（15 15―10 6）0 中宮 佐野 島本
巽西 川 2（15 15―6 4）0 中宮 村本
永山 沢本 2（15 15―9 12）0 樋西 木村
巽西 川 2（15 15―8 5）0 石金 川田
陣西 内勝 2（11 11―3 1）0 川山
佐西 伯尾 2（11 11―9 5）0 古谷
西尾 2（11 11―8 8）1 陣内
秋崎 本岡 2（11 11―10）0 崎
佐谷 伯桝 2（11 11―4 0）0 谷
西尾 2（11 11―0 5）0 谷
陣内 2（11 11―3 1）0 川勝

▼準決勝

山永 沢本 2（15 15―9 12）0 樋西 木村
巽西 川 2（15 15―8 5）0 石金 川田
巽西 川 2（15 15―2 10）0 山永 本沢

▼決　勝

永山 沢本 2（15 2―15 7 7）1 竹内 吉村
樋西 木村 2（15 15―3 7）0 壁山 館本
金石 田川 2（15 15―10 6）0 中宮 佐野 島本
巽西 川 2（15 15―6 4）0 中宮 村本

◆女子シングルス

▼準々決勝

陣内 2（11 11―3 1）0 川勝
西尾 2（11 11―0 5）0 谷古
佐伯 2（11 11―4 0）0 谷桝
秋本 2（11 11―10）0 崎岡
西尾 2（11 11―8 8）1 陣内
佐伯 2（12 6 11―10 11 3）1 秋本
西尾 2（11 11―9 5）1 西尾

▼準決勝

陣内 2（11 11―3 1）0 川勝
西尾 2（11 11―0 5）0 谷古
佐伯 2（11 11―4 0）0 谷桝
秋本 2（11 11―10）0 崎岡

▼決　勝

陣内 2（11 11―3 1）0 川勝
西尾 2（11 11―0 5）0 谷古

◆女子ダブルス

▼三回戦

陣内・岡崎（京・成安女）2―0田附・奥村（滋・守山女）　勝山・堀川（奈・一条）2―1金田・田附（滋・彦根西）　田宮・三浦（奈・一条）2―0田中・吉岡（滋・愛知）　秋元・西尾（大・四条畷）2―0中島・塩田（京・平安女）　石川・森岡（奈・添上）2―1長谷川・山脇（彦根西）　福元・竹内（大・樟蔭東）2―0中沢・望月（兵・神戸商）　尼崎・谷（京・成安女）2―0渡辺・西山（大・池田）　佐伯・古谷（奈・一条）2―0白井・川口（兵・園田）

▼準々決勝

陣岡 内崎 2（15 15―5 5）0 勝堀 山川
秋西 本尾 2（15 15―10）0 田三 宮浦
石森 山岡 2（18 15 8―16 6 15）1 福竹 元村
佐古 伯谷 2（15 6 15―11 15 10）1 尼谷 崎

▼準決勝

陣岡 内崎 2（15 15―5 5）0 勝堀 山川
秋西 本尾 2（15 15―10）0 田三 宮浦
佐古 伯谷 2（15 15―11 11）0 森石 岡川
陣岡 内崎 2（15 15―4 12）0 秋西 本尾

▼決　勝

陣岡 内崎 2（15 15 10―6 9 15）1 古佐 谷伯

＜表紙＞

藤本 典江〔ふじもとのりえ〕
浦辺日佐夫ワールド・ダンサーズ



○……「おふじ」の愛称で親しまれている彼女は宝塚の出身である。昭和三十七年に初舞台を踏んだ。千夏記が芸名で星組に所属、同期に現在活躍中の南原美佐保（星組）薫邦子（花組）がいる。

○……宝塚で五年間、歌、踊り芝居に打ち込んだ。年季が入っている。先輩格の内重のぼる（現在の神宮寺さくら）が、スタジオNo.1ダンサーズの振付師、浦辺日佐夫氏と結婚したことからその縁故で三年前にNo.1ダンサーズ入りした。

○……名倉加代子、永田紀子に続いてNo.1六人の美女のうちの中堅株。江戸ッ子らしくハキハキしていて明朗な性格。それだけにファンの層も厚く多い。

均整のとれた脚線美を誇る色白の美女。

「バドミントンはやったことがない」そうだが、写真でみると仲々どうして堂に入っている。

○……「結婚は？」という質問については「したいのはヤマヤマだけど相手がいなくて…」という返事。ホントかしらね。趣味は読書の由だが、お酒の方もなかなかいけるというもっぱらのうわさ。

どちらかというと日本酒党だそうである。（本人の話）

「どなたかいい候補者はいませんか？」

ちなみに身長は162㌢、46キロ、寸法は上から83、58、86。

（モデル衣装提供カワサキ・ラケット）

≪おしらせ≫ 本誌を運動具店でも販売

『バドミントン界』を今後、全国主要スポーツ用品店でも販売することになりました。

おかげさまで、この雑誌の売れゆきも、日ごとに伸びつつあります。この間、読者のみなさんからは「なぜ、一般の書店でも買えるようにしないか」という要望がかなり強くなってきています。

これには、いろいろむずかしい問題もあるので、その趣旨にそうよう、目下、検討を重ねておりますが、編集部では、とり合えず、バドミントン用具メーカー各社のご協力のもとに、全国の主要なバドミントン用具を扱っているスポーツ用品店の店頭でも、販売いたすことにしました。お住いの近くの店にお問い合わせ下さい。

愛読者へのお願い　振替用紙で編集部あて、直接、申し込まれる方のなかに「何号から」と書いていない場合がしばしばあります。

ことわり書きがない場合は、新しい号からと、当方で判断してしまいますので、必らず「第何号から」「第何号は不要」「第何号だけ何部ほしい」というように、必要なことを、はっきり記入して下さい。

また、あて先き不明などで雑誌が舞いもどることもしばしばありますので、送り先きは、わかりやすい字で、はっきり書いて下さるよう、お願いします。

編集後記

○…ト杯のインドネシア×タイ問題がくすぶり、編集部もとんだ被害を受けました。

外電をたよりに、情報を集めていたかぎりでは、タイの決勝進出権はまちがいないと思われたのに、どたん場で「残りを再試合」というIBFの裁定、それを追いかけて「タイが再試合を拒否、失格でインドネシアが日本と対戦」と、目まぐるしく変化。ついに6号の〝日本の相手はタイ〟という記事が裏目に出る結果となった。

このあたり、新聞とちがい、月一回の雑誌は編集がむずかしいわけです。そのウラミ？をこめて、本号では〝インドネシア問題〟を急ぎ特集、さらにト杯決勝を速報したため、発行日が予定より、若干おくれました。おわびします。

なお、これにともなって、予定した記事がハミ出しました。これからは、次号で掲載しますので、ご了承下さい。（G）

○…いぜん発行が遅くれていることを深謝。表紙の感じはいかがでしょうか。編集部へ来る便りでは仲々に好評のようですが……。先日ユーバー杯のマネジャーをつとめた、山本洋彦君（北辰電機）が結婚されました。その披露にミックス・ダブルスのエキシビション・マッチを、岸体育館でやり「仲々、面白い趣向」と評判でした。

どなたか山本君に続く人はいませんか？

○…トマス杯の惜敗はみなさんとともに口惜しい限りですけれど、世界への距離は段々とちぢまりつつある傾向、一念発起してほしいものです。

いま女子の精鋭が欧州遠征中です。

全英からの「うれしい便り」を期して待ちましょう。

「バドミントン界」を通じていろんなOB、OGに会います。意外に多いのにおどろきました。ご支援と、ご鞭撻をお待ちします。（M）

【バドミントン界】　第七号
昭和45年2月25日 印刷
昭和45年3月1日 発行
編集兼発行人　川端 昇市
発行所　東京都渋谷区神南町25
岸記念体育会館内
日本バドミントン協会
電話 四六七・三一一一(内線)二五一
四六七・七〇九五(直通)
郵便番号・一五〇
振替口座・東京三二一九三
印刷所　東京都江東区永代一の五の二
有限会社 和田印刷所
定価　一部　百円

次号予告

次号はト杯アジア・ゾーン決勝、インドネシア×日本ワイド特集です。

残念なことに日本は宿願を達成できませんでしたが、熱戦のもようを初め、選手団の話、記者や先輩たちの日、こぼれ話などを通じ〝決戦〟が日本になにを与えたか、今後の問題点はなにか…などを、広い視野から考えてみたいと思います。

写真グラフも杯と社会人×学生の熱戦からのもようです。このほか、高校選抜合宿からの続編として、参加した選手の〝私たちは、なにを学んだか〟前号で掲載できなかった、中学生の講習会をお届けします。

また、間に合えば、全英選手権など海外遠征に参加した日本選手団からの便りものせるつもりです。

【主な内容】

▽ト杯特集
▽続・高校選抜合宿から
▽二階堂スポーツ教室・中学生講習会
▽連載「百万人のバドミントン上達法」
　伊藤基記、毛利清志、遠井稔男先生執筆
▽北から南から「群馬県協会20周年記念」大会ほか
▽読者から「全国中学生大会の開催を」
▽提言シリーズ　第三回
▽有名選手の就職、進学先き
▽写真グラフ（ト杯、社会人×学生大会から）

……ご期待下さい……

日本バドミントン協会検定合格ネット・メーカー

松本製網株式会社	大阪府八尾市福万寺町4-72	TEL 0729 (2) 3217
	◎ 20／12 倉敷ビニロン（MATVMOTO）	
鐘屋産業株式会社	東京都文京区本郷3-17-2	TEL 03 (811) 3773
	◎ ナイロン A級 ◎ 綿 B級	
（株）寺西喜商店	大阪府八尾市福万寺町4-31	TEL 0729 (2) 3210
	◎ バドミントン・ネット C検定	
（株）ジイティヤング	本社 大阪市南区東平野町2-25	
	支社 東京都墨田区本所1-36-2	TEL 03 (623) 7155
	◎ 20番手 12本クレモナビニロンテトロン引紐	
	◎ 20番手 12本綿 テトロン引紐	
	◎ 20番手 12本綿 クレモナロープ引紐	
ミセキネット製作所	埼玉県北葛飾郡幸手町中1-7-4	TEL 04804 (2) 0379
	◎ ミセキ VA ◎ ミセキ A	

YONEYAMA RACKET

スマッシュ!



NO.8000

Alumina Hy-Power

アルミナハイパワー

アルミフレームに　アルミシャフト採用!!

軽い ― アルミニウム合金の比重は約2.7で、銅の8.9や鉄の7.9に比べて⅓に過ぎず、非常に軽くリストの弱いプレーヤーに向きます。

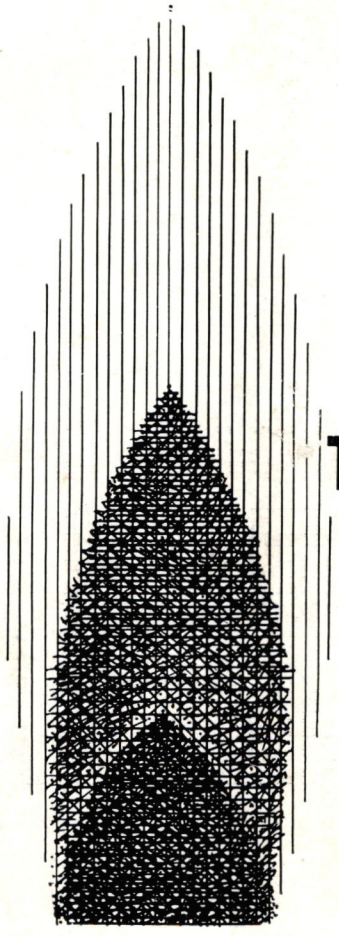
強い ― 特殊製法によるアルミニウム合金をラケットフレームに用い、鋼鉄に匹敵する強さが発揮されました。

弾む ― 木製、スチール製に比較して柔軟性、反撥力が抜群。打球の初速が早く、更に加速が増加してすばらしいスマッシュが打てます。

株式会社 ヨネヤマラケット

全国運動具専門店でヨネヤマのラケットと御指定下さい。

月刊「バドミントン界」
第七号
昭和四十四年十二月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十五年三月一日発行（毎月一回一日発行）
発行所
東京都渋谷区神南町二五
岸記念体育会館内
日本バドミントン協会
定価百円



TOKYO gas

東京瓦斯株式会社

東京都中央区八重洲1の3
電話(273)0111(大代表)